長野県更埴市

社宮司遺跡

——西部沖県営ほ場整備に伴う発掘調査報告書——

1985

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

長野県更埴市

社宮司遺跡

——西部沖県営ほ場整備に伴う発掘調査報告書——

1985

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会

信州大学附属図書館教育学部分館

序

昭和56年度より、10箇年計画で始まった西部沖県営ほ場整備事業も５箇年が過ぎ、整然と姿を変えた田畑が目に付くようになってまいりました。機械化が進み近代化した農業にとって、ほ場整備事業は、不可欠なものとなっております。しかし、こうしたほ場整備事業は、私たちの祖先が残していった貴重な文化遺産が姿を消す大きな原因にもなっています。更埴市内においても、すでに十数ヶ所の遺跡が姿を消しました。

文化財の健全な保存は、現状のまま後世に伝えることが本旨でありますが、すべての遺跡を現状のまま残すことは不可能です。幸い社宮司遺跡は、詳細な発掘調査が実施され、得られた貴重な記録を本報告書として後世へ残すことができました。本報告書が多くの方々に広く利用いただけるとともに、当地方の歴史文化の一端が御理解いただければ幸いと思います。

無事発掘調査が終了できましたのは、東信土地改良事務所はじめほ場整備委員会、御指導いただいた諸先生方、作業に従事いただいた作業員のみなさまの御協力と御努力の賜であり、ここに深甚なる敬意をあらわす次第であります。

昭和61年３月31日

更埴市教育委員会教育長
更埴市遺跡調査会会長
和　田　　基

例　　言

1、本書は、昭和60年4月5日から同年5月16日の間に、西部沖県営ほ場整備事業に先だって実施された社宮司遺跡の発掘調査報告書である。

2、調査は佐藤信之が担当し、遺構実測は山根洋子、佐藤が行った。なお遺構実測図中のNは真北を示す。

3、本書の編集は佐藤が行い、遺物の実測及びトレースは、山根、田中富子、佐藤が行った。

4、発掘調査についての執筆は佐藤が行い、信州大学理学部の酒井潤一氏、野尻湖博物館の中村由克氏に寄稿いただいた。

5、出土遺物及び、遺構については、上山田小学校の森嶋稔氏、長野県史刊行会の笹沢浩氏の御教示を得た。

6、本調査の出土遺物、実測図、写真等は全て更埴市教育委員会に保管されている。なお、本調査の関係資料については、社宮司遺跡を略してＳＧＪと表記した。

目　　次

序

例　言・目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　調査の概要……2

Ⅲ　調査日誌……3

Ⅳ　遺跡の環境……4

Ⅴ　遺構と遺物……7

Ⅵ　まとめ……18

Ⅶ　社宮司遺跡の地質について……22

Ⅷ　社宮司遺跡花粉分析報告……25

Ⅸ　図版……33

Ⅹ　写真図版……39

Ⅰ　調査に至る経過

昭和56年より実施された西部沖県営ほ場整備事業にあたり、すでに58年には北稲付遺跡の発掘調査が実施されている。

昭和59年７月、県教育委員会より60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る文化財についての照会があり、市教育委員会では、東信土地改良事務所より通知のあった地区内に、石原Ａ遺跡他２遺跡が含まれることを連絡した。それにより、10月に県教育委員会、東信土地改良事務所、市農林課、市教育委員会による現地協議が行われ、試掘調査を実施することになり、10月29日と12月６日に実施した。その結果、宮川遺跡、成澤遺跡は調査の必要性がなくなったが、新たに社宮司地籍に遺跡が発見され、12月12日、社宮司遺跡として発見届を提出した。12月28日、県教育委員会より発掘調査を実施するよう通知があり、市教育委員会は夏場施工となる社宮司遺跡を費用3,800,000円で４月に、秋場施工となる石原Ｂ遺跡については費用1,800,000円で10月に調査を実施するよう計画を立て、昭和60年１月７日、県教育委員会に提出するとともに、調査の準備を開始した。

昭和60年４月５日、発掘通知を提出するとともに、発掘調査を開始した。また社宮司遺跡分の国庫補助申請を行い、更埴市と更埴市遺跡調査会の間に委託契約が結ばれた。このように急を要したのは、工事がかなり進行していたためである。調査は５月16日に終了した。６月に入り、ようやく県教育委員会より、発掘調査計画書、及び同予算書についての通知があり、東信土地改良事務所と更埴市の間に契約が結ばれた。８月１日に補助金の交付決定があったが、９月に入り、石原Ｂ遺跡周辺は60年度には工事を実施しないとの連絡があり、10月23日、補助金の計画変更承認申請書を提出した。

第１図　調査地遠景

II 調査の概要

1 発掘調査委託者　東信土地改良事務所・更埴市
2 発掘調査受託者　更埴市・更埴市遺跡調査会
3 発掘調査実施者　更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
4 発掘調査場所及び土地の所有者　更埴市大字八幡字社宮司
　更埴市大字八幡字森下　西部沖県営ほ場整備西沖委員会
5 発掘調査遺跡名　社宮司（シャグウジ）遺跡（新発見）（市台帳No.18－85－16）
6 調査の目的　公共事業、西部沖県営ほ場整備に伴う当該遺跡の記録保存
7 調査期間　昭和60年4月5日～同年5月16日（32日間）
8 調査面積　工事面積　100,000m²の内1,000m²
9 調査方法　グリッド調査法（3×3m）
10 調査費用　費用総額　3,800,000円
　東信土地改良事務所　2,755,000円
　文化財保護部局　1,045,000円
11 調査会の構成
　会長　和田　基　更埴市教育委員会教育長
　理事　久保忠一　更埴市議会社会文教委員会副委員長
　　山崎　衛　更埴市教育委員会教育委員長
　　島田弘三　更埴市区長会長
　　小川　茂　更埴市役所総務課長
　監事　武井隆義　更埴市社会教育委員会委員長
　　小林　栄　更埴市会計課長
　幹事　飯島　忠　更埴市教育委員会社会教育課長
　　渡辺好和　更埴市教育委員会社会教育係長
　　矢島宏雄　更埴市教育委員会社会教育主事
12 調査団の構成
　団長　和田　基　更埴市教育委員会教育長
　調査指導　森嶋　稔　上山田小学校教諭
　　黒崎　直　文化庁記念物課文化財調査官
　　酒井潤一　信州大学理学部助教授
　　中村由克　信濃町立野尻湖博物館学芸員
　調査担当者　佐藤信之　更埴市教育委員会社会教育課
　調査員　山根洋子　更埴市教育委員会社会教育課
　現場作業員　岡田栄子 小林芳白 桜田敏恵 桜田みち子 杉浦亥佐 高野貞子 田中富子
　　塚田弥蔵 町田美枝子 松本秋夫 松本　敏 南沢時子 村山　豊 吉池せつ
　整理作業員　青木美知子　牛沢一子　小林昌子　田中富子
　調査協力者　東信土地改良事務所　西部沖県営ほ場整備西沖委員会
　事務局　飯島　忠 渡辺好和 平林喜代士 矢島宏雄 佐藤信之 田中啓子 山根洋子（社会教育課）

Ⅲ 調 査 日 誌

4月5日　本日より発掘調査を開始する。重機により表土が取り除かれた部分を削り、遺構の検出に務める。

4月9日　試掘調査の際に確認された1号溝掘り下げ、集石実測開始。溝内より遺物多数出土。

4月16日　酒井先生により、地質調査を実施。花粉分析を依頼する。

4月17日　1号溝の南側に検出されていたピット群が、掘立柱建物址となる可能性が強くなったため、重機により南側を拡張し、1号掘立柱建物址を検出した。まだ数棟ありそう。

4月18日　掘立柱建物址の検出を続ける。2号・3号・4号の掘立柱建物址を検出。

4月22日　1号・3号掘立柱建物址を掘り下げると、柱の掘方内には柱根と礎板が残っていた。

4月25日　6号掘立柱建物址が南へ延びているため、重機によりさらに南へ拡張する。現在までに7棟の掘立柱建物址を検出する。

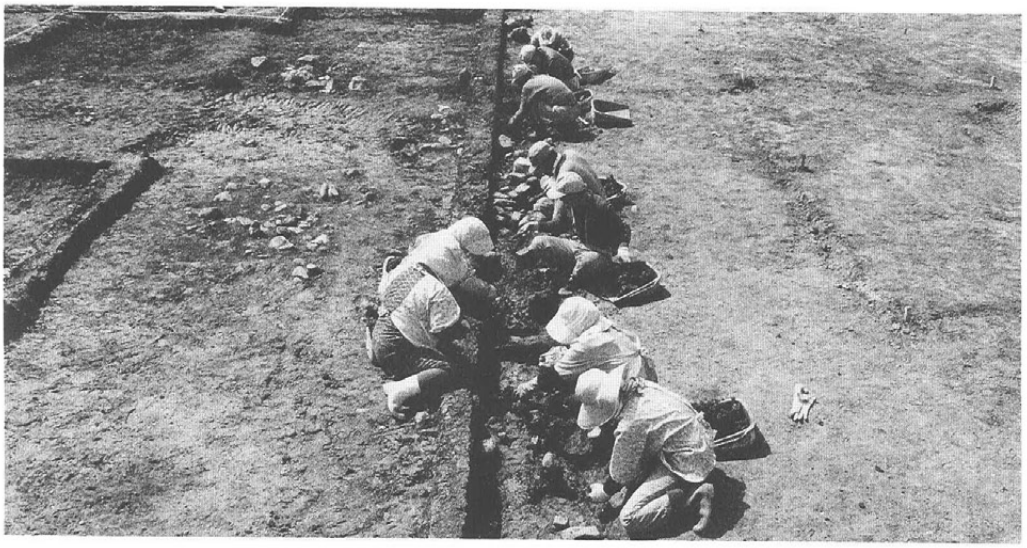
5月2日　西側未調査部分へ拡張を進めるが、黒色粘質土が堆積しており、遺構の検出は難しい。

5月4日　掘立柱建物址の柱及び、礎板を取り上げる。礎板は丸木を半截したもので、表皮が付いていた。

5月9日　排土場所として利用していた部分に重機を入れ、調査が終った部分に排土を移動して遺構の検出を行うが、検出面の粘性が強くなかなか進まない。

5月13日　遺構の検出がほぼ終了し、新たに8号掘立柱建物址、4号・5号・6号の溝、ピットなどが検出された。

5月16日　残った部分の実測を行い、本日で調査を終了した。



第2図　発掘調査風景

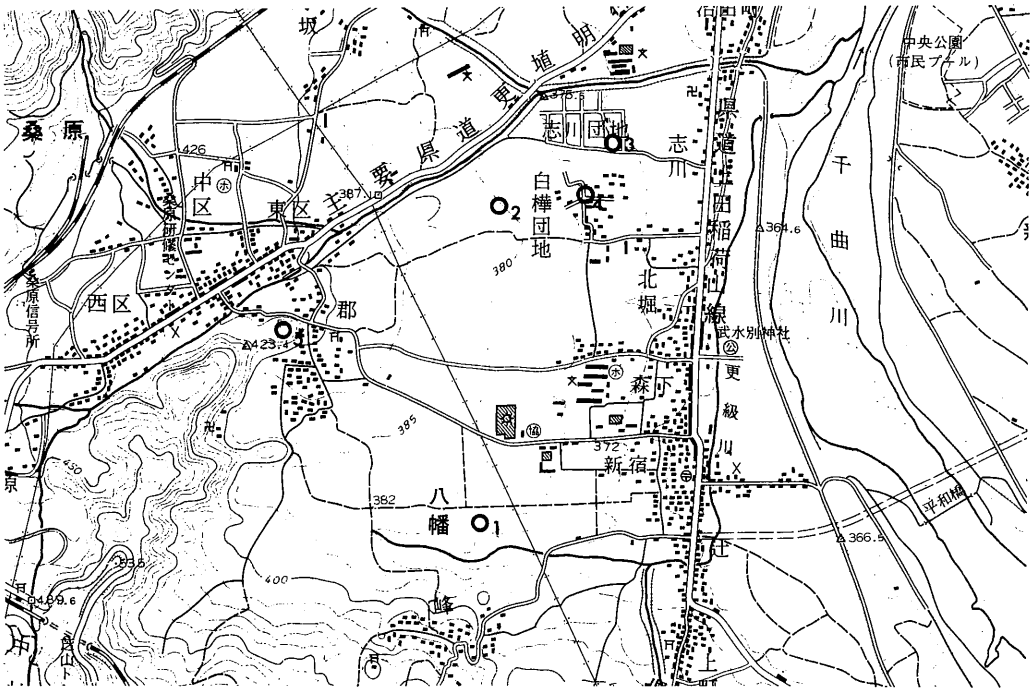
Ⅳ　遺跡の環境

社宮司遺跡のある更埴市八幡地区は、千曲川左岸に位置している。聖山系に源を発し東流する佐野川は、千曲川の一小支流であるが、千曲川に向かってかなりの規模の扇状地を形成している。社宮司遺跡は、その扇央部の南端に位置している。遺跡の南側には更に支流の比高－３ｍ程の宮川が流れ、それに向かってなだらかな傾斜面となっている。一帯は湿地帯であるが、これは扇状地のある基盤が千曲川氾濫原であり、稲荷山、八幡の集落がある自然堤防内の後背湿地に堆積した扇状堆積でもあるからとされている。

扇状地南限を画する台地は姨捨土石流によって形成されたものであり、台地上には弥生時代から平安時代の集落址と想定される峯謡坂遺跡が拡がり、丸山古墳が造られている。また西側の矢先山とそれに続く山頂には、矢先山古墳、山ノ神古墳とともに、矢先山経塚がある。蓋付筒形の経筒外容器２点と、和鏡１面が出土している。平安時代に属する経塚であり注意される。

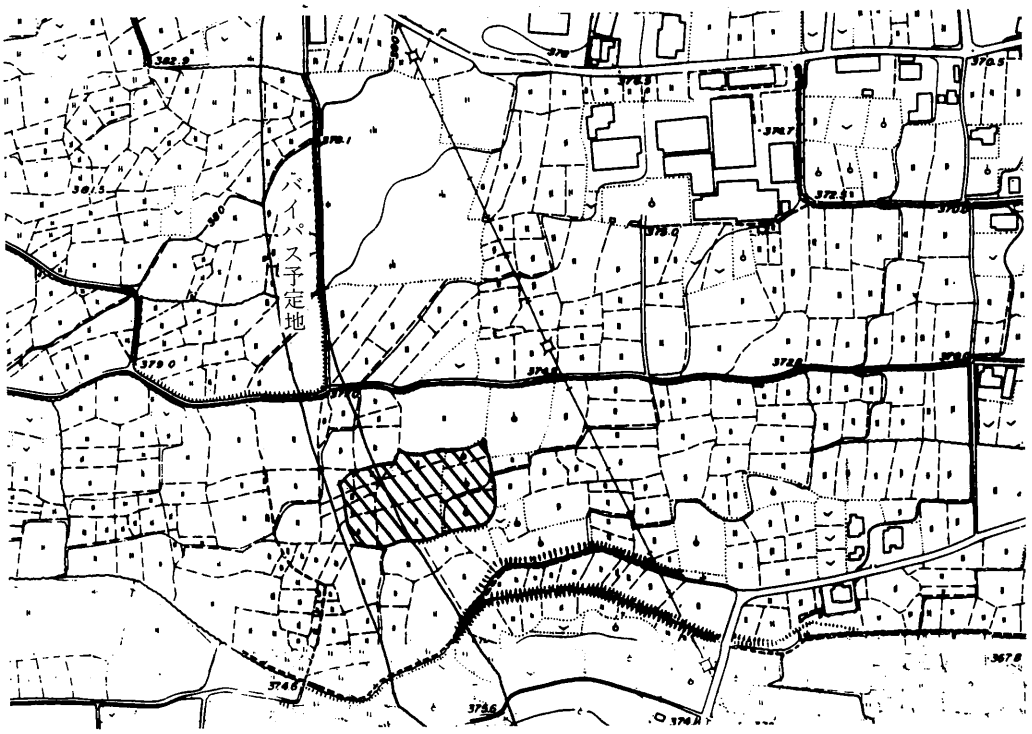
扇状地上には、大きく条里的地割りとも見られる地割りが行われており、古くから郡地名のあるところとして注目されてきた地帯である。したがって、一帯は八幡遺跡群として把握されていたのである。近年ほ場整備が進行し、宅地開発、工場建設等によりその大半が変貌しようとしている。したがってその開発に伴い実施された青木遺跡、六反田遺跡、北稲付遺跡の発掘調査により、ほぼ弥生時代後期から古墳時代の遺構、そして掘立柱建物址などが検出されるに至っている。特に北稲付遺跡からは、平安時代中ごろと思われる木製品とともに、木簡も出土しているのが注意される。また遺構こそ検出されていないが、広範囲より古瓦も出土しており、青木遺跡からは瓦塔の破片なども表採されていて、一部には平安時代の定額寺でもある安養寺をあてる人もある。今回調査を実施した地点は、かなりの湿地帯のため、遺跡が存在しないのではないかとされていた地点であったが、試掘調査により新たに発見された遺跡である。

遺跡名は字名によるもので、その名のとおり諏訪地方を中心として広く分布するミシャグウジ信仰と関係を持つものと考えられ、調査区西側には石祠も祭られている。地元では「お高根（タカネ）さま」と呼ばれているが、ミシャグウジ信仰との関係は定かではない。

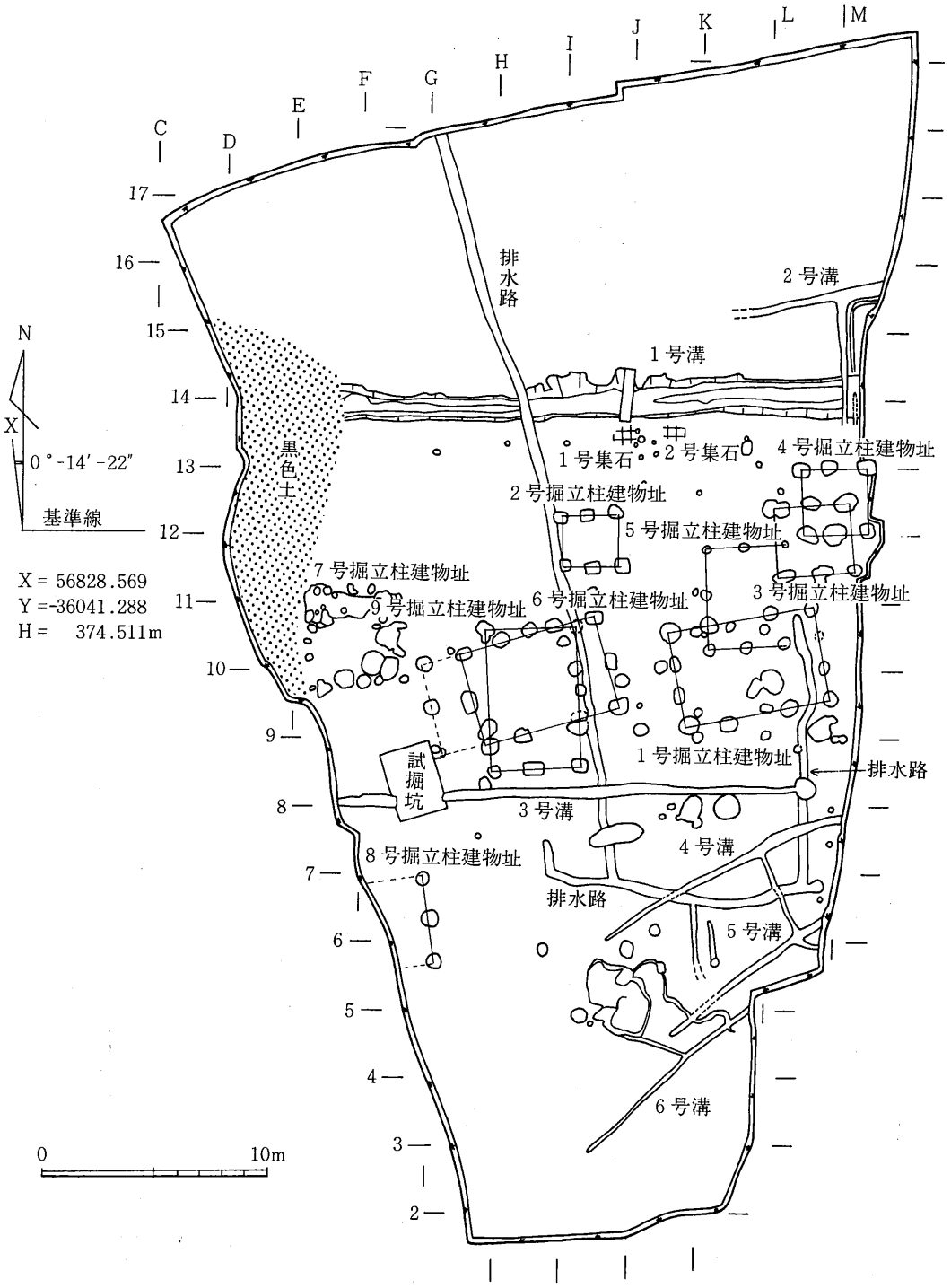


1 社宮司遺跡　2 北稲付遺跡　3 六反田遺跡　4 青木遺跡　5 矢先山経塚

第3図　遺跡の位置（1：25,000）



第4図　遺跡周辺図（1：5,000）



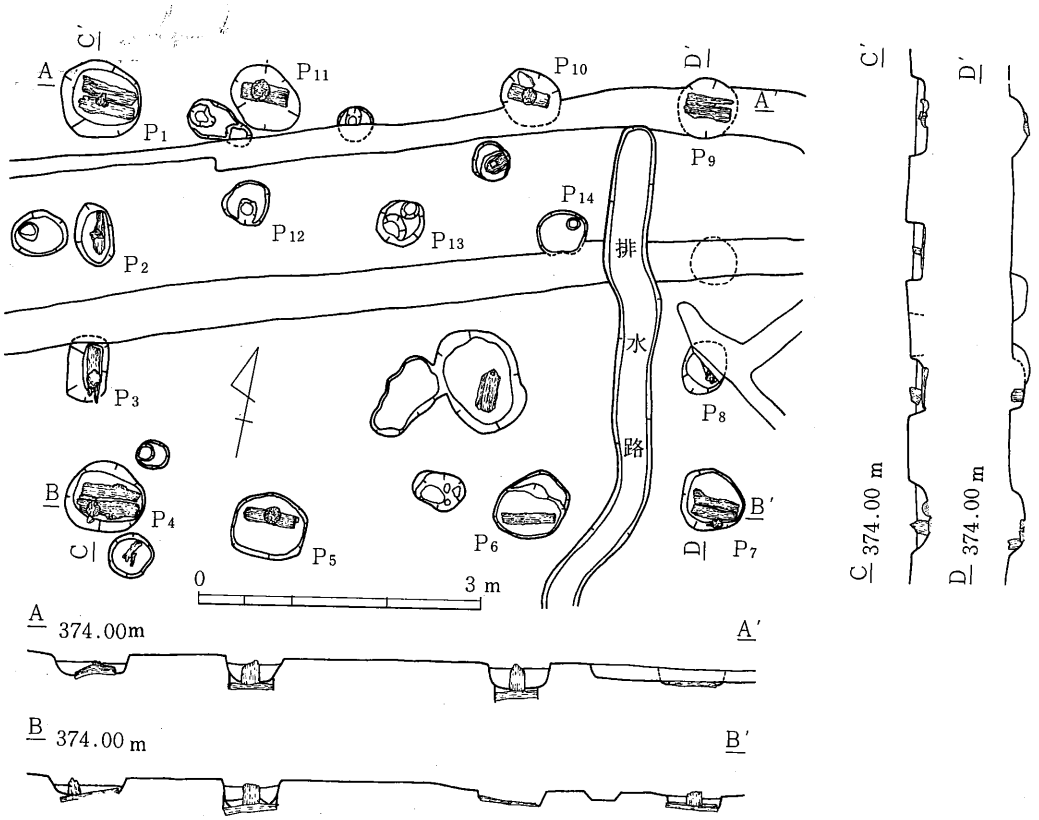
第5図　調査区全体図（1：300）

V　遺構と遺物

今回の調査により検出された遺構には、掘立柱建物址９棟、溝状遺構６本、集石２ヶ所の他に、多数のピットがある。調査地域は水はけの悪い所であるため、掘立柱建物址には礎板が敷かれており、柱根も残存していた。

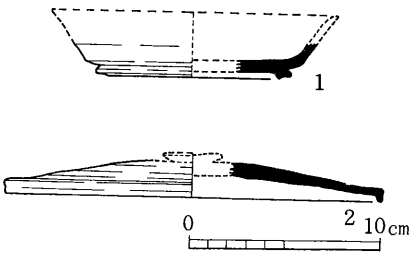
１号掘立柱建物址（第６図・第７図、図版８）

遺　構　調査区のほぼ中央より、６号掘立柱建物址と並んで検出された建物址で、５号掘立柱建物址と重なっている。長軸方向をＮ－80°－Ｅにもち、規模は6.5ｍ×4.3ｍで、桁行３間、梁行３間の建物となる。桁行の柱間は中央部が2.8ｍと広く、両側は約1.8ｍ前後となっているのに対して、梁間はほぼ1.4ｍ前後となっている。柱の掘方は桁行が80cm×70cm、梁行は東側を失っているがほぼ70cm×40cmを計ることができ、本来方形であったと思われる。各掘方には、栗材と思われる直径20cm前後の丸木を60cmほどの長さにし、さらに半截して、隅となる部分に２枚、他は



第６図　１号掘立柱建物址

1枚を、それぞれ桁梁方向に合わせた礎板として敷かれていた。またP_5とP_6、P_{10}とP_{11}の礎板はそれぞれ接合し、P_1・P_4は掘方内の2枚が接合する。各礎板は掘方の基底より沈んでおり、かなりの重量が柱にかかっていたと考えられる。P_6・P_9を除く掘方には柱根が残っていた。いずれも外形が確認できるものは、直径20cmほどの芯持丸木材で、表面は削られている。使用された材は、礎板同様、栗と思われる。

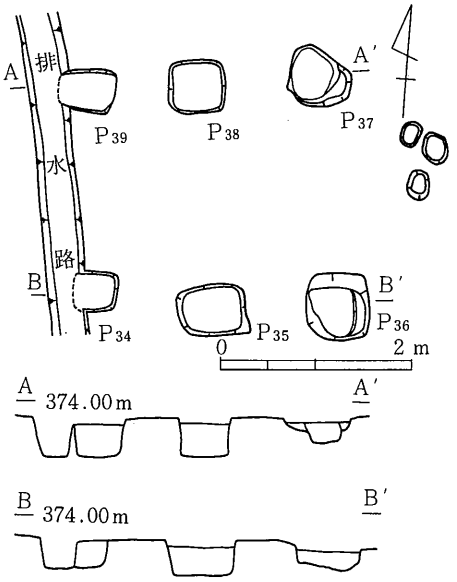


第7図　掘立柱建物址出土遺物

遺　物　柱の掘方からは若干の土師器、須恵器片が出土している。1はP_{11}より出土した須恵器で、高台をもつ坏形土器である。他には須恵器の壺形土器、土師器の甕形土器などがある。

2号掘立柱建物址（第7図・第8図、図版9）

遺　構　6号掘立柱建物址の北側に位置する建物址で、長軸方向をN－80°－Eに取り、規模は柱掘方の中心より2.7m×2.5mと小型で、桁行2間、梁行1間の建物である。柱間は桁行が1.3m、梁行が2.5mとなるが、西側は重機が乗った際に沈んでしまい変形している。柱掘方は60cm～70cmほどの方形で、40cm前後の深さを持っている。1号掘立柱建物址に見られたような礎板、及び柱の痕跡などは検出できず、また掘方内の覆土も、ほとんど漆黒の粘質土一層であった。



第8図　2号掘立柱建物址

遺　物　掘方内から土師器、須恵器の破片と自然遺物が出土している。2はP_{39}より出土した須恵器の蓋形土器で、口径が21cmと大きいのに対して、器高が低い。その他同じP_{11}からは底部ヘラオコシの須恵器坏形土器が、他の掘方からは、内面黒色処理された土師器坏形土器の破片なども出土している。自然遺物はヒョウタンと思われるもので、ほぼ原形のままP_{36}より出土している。

3号掘立柱建物址（第9図、図版10）

遺　構　1号掘立柱建物址の北側より、4号掘立柱建物址と重なって検出された建物址である。長軸方向をN－85°－Eに取り、規模は東側が調査区外となるため不明であるが、2号掘立柱建物址と同様、桁行2間、梁行1間の建物と考えられるため、3.4m×3.2mと思われる。柱間は桁行が1.7m、梁行が3.2mを示す。柱の掘方は双円形で、最大120cm×70cmを計ることができるが、不規則である。双円形の掘方はP_{31}を除き西側が大きくなっており、小さい方の穴は柱の抜き取り穴か、建て替えの痕跡と思われる。P_{32}・P_{41}には、約30cm×20cmの板材の礎板が残されていた。

またP41の小さい穴には、直径10cm前後の河原石が詰められていた。

遺　物　本建物址の柱掘方からは、遺物は出土していない。

4号掘立柱建物址（第9図、図版10）

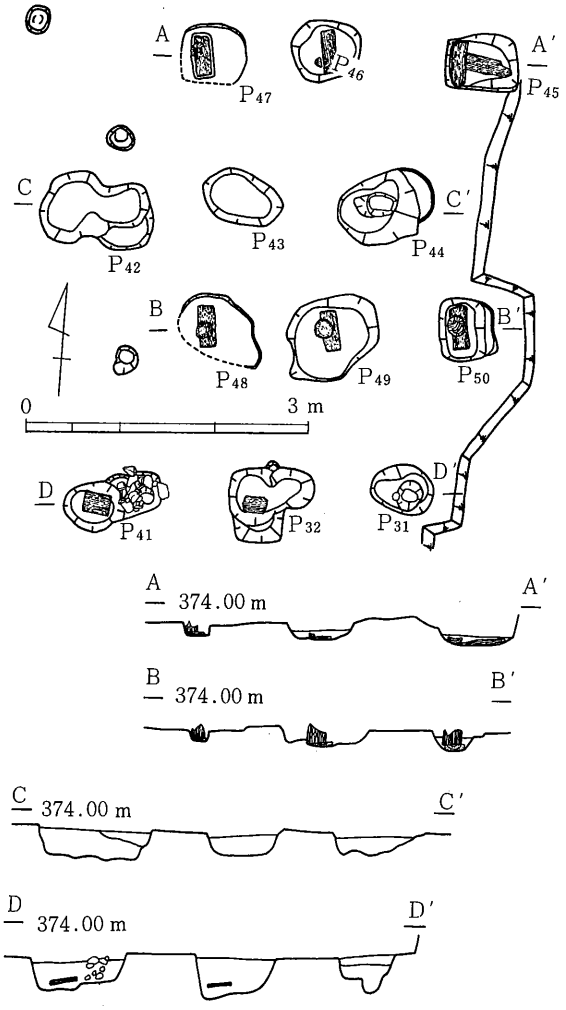
遺　構　3号掘立柱建物址と重なって検出された建物址で、やや北東にずれ、長軸方向はN－5°－Wで3号掘立柱建物址と直交する。規模は2.7m×2.9mと、梁行がやや長い桁行2間、梁行1間の建物址である。柱間は桁行が1.3m、梁行が2.9mを計る。掘方は検出面から5cmほどの深さしか持たず、形状を失っているものもあるが、70cm前後の方形であったと思われる。すべての掘方より長さ45cm、直径20cmほどの栗材と思われる丸木を半截した礎板が出土している。礎板は梁行の方向に合わせて敷かれており、P45のみ十字に敷かれていた。礎板は1号掘立柱建物址同様、掘方の底面より10cmほど沈んで検出された。礎板の接合を行ったが接合せず、この建物址はまだ東へ延びるのか、あるいは同時に作られた建物址があったものと思われる。南側の掘方には礎板上に柱根が残っており、20cmほどの円形の柱が使用されていたことがわかる。

遺　物　本建物址の出土遺物はない。

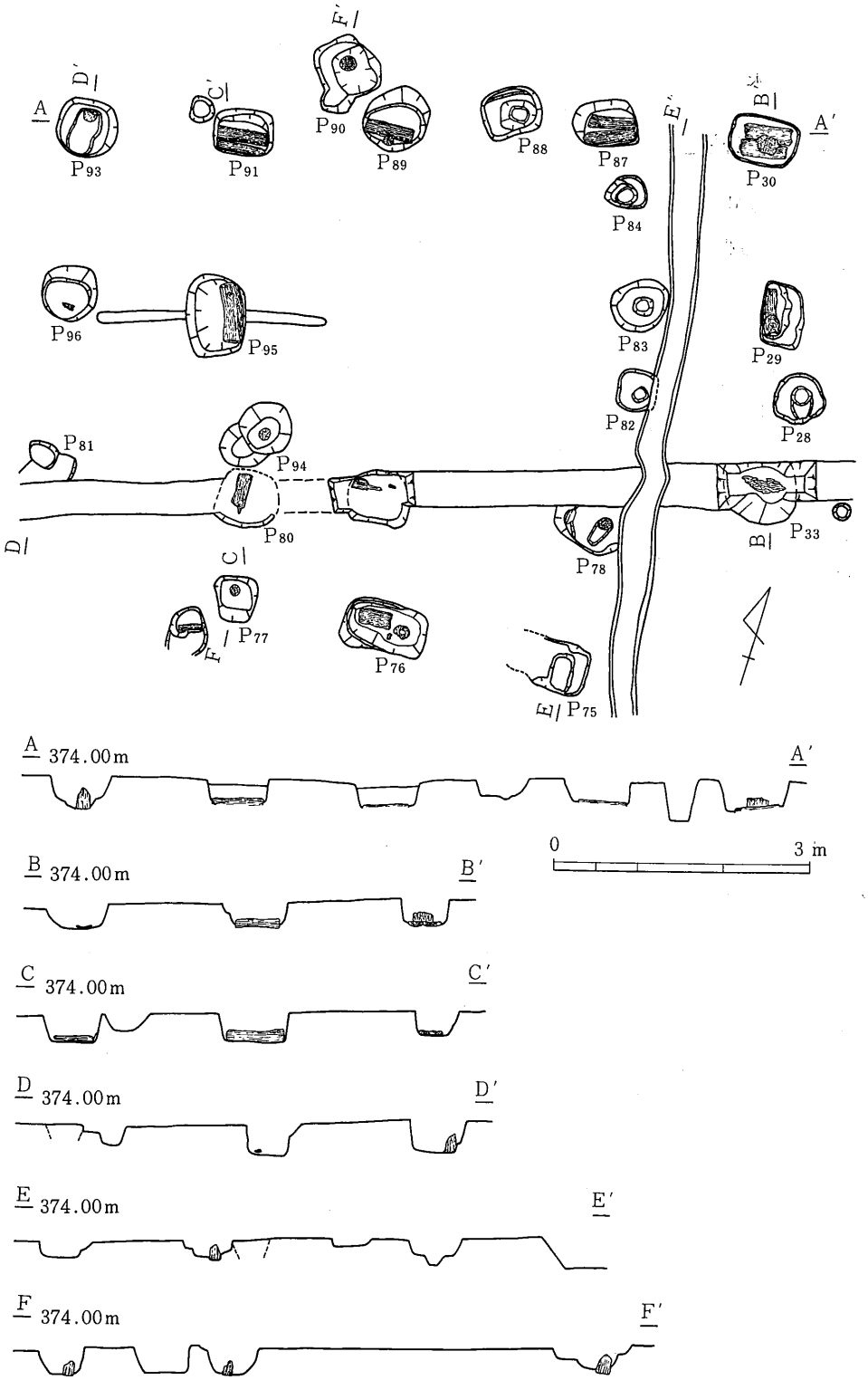
5号掘立柱建物址

遺　構　1号掘立柱建物址の北側に、重なって検出された建物址である。長軸方向をN－85°－Eに持ち、東妻側が検出できないため規模は不明であるが、梁行は2間で4.6mを計ることができる。柱間は桁行が1.7m、梁行が2.2mほどである。掘方は約40cmの円形で、検出面より15cm前後の深さが多く、底部にさらに直径15cmほどの柱穴が見られるが礎板はない。掘方や柱痕跡、またP65より出土した柱根が小さいことから、他の建物址に比べてきゃしゃな建物であったと思われる。

遺　物　柱の掘方内から土師器、須恵器片が出土している。器形がわかるものとして



第9図　3号、4号掘立柱建物址



第10図　6号、9号掘立柱建物址

は、須恵器で底部に回転糸切りを持つものと高台を持つ坏形土器、土師器の甕形土器がある。

6号掘立柱建物址（第10図、図版11）

遺　構　調査区中央より、1号掘立柱建物址と並んで検出された建物址である。南側は暗渠排水路で壊されていたが、暗渠排水路を掘り下げると、礎板に使用された樹木の表皮が残っており、わずかに掘方も検出できた。規模は8m×4.2mで、3間×2間の建物の西妻側に、1間の廂が付くものと思われる。柱間は1号掘立柱同様、桁行の中央部分が2.6mと広く、他は1.8m前後となっており、梁行は2mを計ることができる。柱の掘方は、妻側中央部が建物址の短軸に、他は長軸方向に長辺を持つ方形で、ほぼ80cm×60cmとなっており、廂部分は70cmほどの円形である。母屋部分の柱掘方内には、1号掘立柱建物址同様の礎板が敷かれており、P_{30}には径20cmほどの柱根が残っていた。廂部分には礎板が敷かれておらず、P_{93}には径16cmほどの柱根のみが残っていた。

遺　物　土師器、須恵器の破片が若干出土しているが、器形の確定できるものはない。

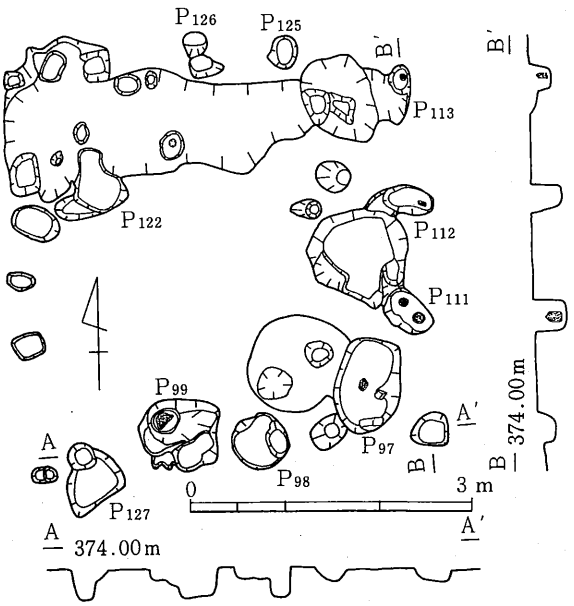
9号掘立柱建物址（第10図、図版11）

遺　構　6号掘立柱建物址と重なって検出された建物址で、長軸をN－1°－Eに取り、ほぼ6号掘立柱建物址と直交している。規模は6.4m×4mで、桁行3間、梁行2間となる。桁行の柱間は2本が失われているが、中央部分が2.6mと広く、両側は1.8m前後となっており、梁行の柱間は2mほどである。掘方は60cm前後の円形ないし方形で、P_{76}のみがやや大きく底部に礎板を持っている。他は掘方内に直接柱が建てられており、P_{77}・P_{78}・P_{90}・P_{94}には径15cm前後の柱根が、P_{83}・P_{88}には掘方底部に径20cmほどの柱穴が認められた。なお排水路を掘り下げた際、北東隅の掘方を気付かず壊してしまったが、同位置より柱根が検出されている。

遺　物　遺物の出土はない。

7号掘立柱建物址（第11図、図版9）

遺　構　6号掘立柱建物址の北西より検出された遺構である。ほぼ1辺4mほどの方形に、20cm前後のピットが30本ほど集中しているが、一定の配列を示しておらず、掘立柱建物址と考えるより、簡単な上屋構



第11図　7号掘立柱建物址

造で作られた粗雑な建物であったと思える。したがって、掘方（柱穴）も20～30cmと小さく、検出された柱根も10cm前後と細い。

遺　物　土師器と須恵器があり、他の建物址に比較すると多いが、いずれも小片である。器形が判断できるものには、土師器では内面黒色処理された坏形、高台を持つ坏形、甕形土器、また、蓋形の須恵器などがある。

8号掘立柱建物址（図版11）

遺　構　調査区南側で検出された唯一の建物址である。妻側と思われる3ヶ所の礎板を検出したのみで、掘方はすでに失われていた。礎板は1号掘立柱建物址と同様にして作り出されたものであり、長さ40cm～50cm、幅10cmほどのものを梁方向に合わせ、約2m間隔で敷いている。

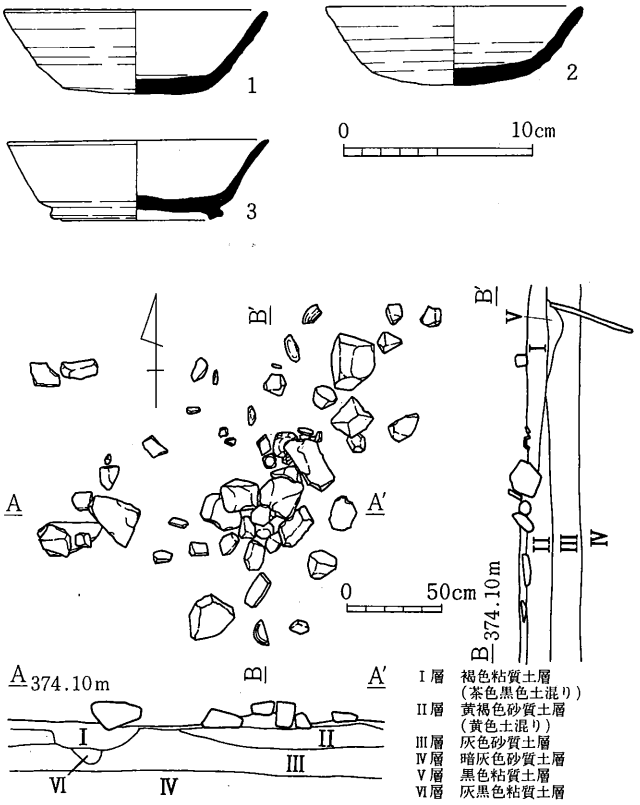
遺　物　　出土遺物はない。

1号集石（第12図、図版14）

遺　構　調査区北側を東西に走る1号溝の南側に接して検出された遺構である。約20cmの礫10点ほどのまわりに、約10cmの小礫が数十個集まったもので、小片と化した土器が多く混入している。調査区内には石が少ないため集石として扱ったが、その性格は不明である。ただ1号溝の覆土も同様のあり方を示しているので、何らかの関係があるかもしれない。また集石のまわりには4本の杭が打たれていた。

覆土も同様のあり方を示しているので、何らかの関係があるかもしれない。また集石のまわりには4本の杭が打たれていた。

遺　物　土師器、須恵器が出土している。1・2はほぼ完形の須恵器坏形土器で、底部には回転ヘラオコシが観察できる。3は1号溝址より出土したものと接合できた、高台をもつ坏形土器である。このほか底部に木葉痕を残す土師器甕形土器の破片などもある。

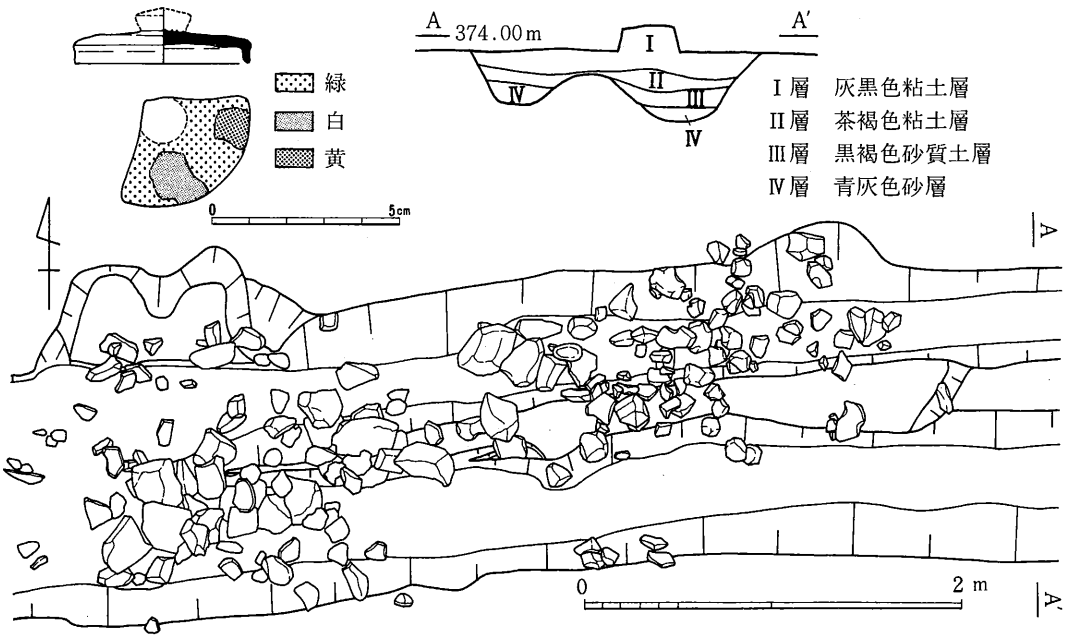


第12図　1号集石及び出土遺物

1号溝（第13図、図版1～7・12～14）

遺　構　調査区北側より、遺構の有無を分ける溝として検出されたもので、その方向は東西にまったく一致している。西側では幅110cm、深さ60cmほどで2段に掘られていた溝が、中央やや西寄りの地点で2本に分かれ、東側では幅120cm、深さ50cmと、幅70cm、深さ30cmを計る溝となっている。覆土は上面は粘土層で覆われていたが、下部には荒い砂の層があり、水が流れていたものと思われる。また覆土内には10cm～20cmの石が多数含まれており、部分的には溝内部を覆い尽す所もあった。

遺　物　溝底部近くより、土師器、須恵器、木製品、自然遺物が多数出土している。1～12までが土師器坏形土器で、7を除き内面黒色処理が施され、底部は丸底にナデが施された1、糸切りの後スリケシを行っている2・3、糸切り痕をそのまま残す6～9、高台を持つ11・12と、様々である。13～35は須恵器坏形土器で、28までは回転ヘラオコシによって切り離しが行われており、ロクロの回転方向を見ると右まわり25、左まわり24と両者が見られるが、大半は左まわりとなっている。また底部から体部への移行は、稜を持つものと持たないものの2種が見られる。33までは回転糸切りによるもので、ヘラオコシに比べ体部が弯曲している。29～31には「通」「⊕」と、もう1点判読できない墨書がある。34・35は高台が付くもので、体部は軽く外反している。36～38は蓋形の須恵器で、「友主」「大」と墨書が見られる。38は口径19cmと大振りである。41は内面黒色処理された高坏形土器で、42も同様の脚部と思われる。43～46は高盤形の須恵器である。



第13図　1号溝及び出土三彩陶器

47・48は土師器製の脚で、47には４つ、48には３つの孔が穿たれている。上部を失っており、他に例が見られないため器形は不明であるが、内面に煤が付着していた。49～53は甕形の土師器で、49は器面をヘラミガキによって整形しているが、他はロクロによるナデを残している。今回の調査で出土した遺物の中で、甕形土器の占める割合は極端に少ない。54は鉢形の須恵器で、口縁端部は広く面取りされている。55は短頸の四耳壺形、56～58は長頸壺形、59は四耳壺形の須恵器である。断面三角形の凸帯を巡らし、相対する４箇所に粘土紐を貼って耳となしており、穿孔などはない。このタイプの四耳壺としては、県下で最大のものと思われる。他に小壺蓋形の三彩陶器（第13図）がある。復元径4.7cmほどで、頂部のつまみは失っている。胎土は灰白色を呈し、全面をロクロナデしており、外面には緑・黄・白の三彩釉を、内面には薄い緑の釉を施している。このほか、窯変の激しい布目瓦（図版４－16）、砥石（図版６－７）なども出土している。

次に木製品では、加工痕の認められる資料は多かったが、製品となるものは意外に少なかった。１は鍬の身の部分で、ほぼ中央から木目にそって割れている。厚さは２cmほどで先端ほど薄く、身の先端及び側辺は、鉄刃を着装するためにＶ字状に削られている。現存する身長は29cmであるが、原形は30cmあったと思われる。柄孔は長さが5.5cmで、幅は推定４cmほど、身に対して65度ほどの角度をもって孔があけられている。２は心持丸木材を利用した砧棒である。身は径４cmほどの八角ないし九角形に作られ、削り細めて柄としている。かなり使用されたらしく、柄には手擦、身には１面に集中した敲打痕が見られる。全長で32cmを計る。３は曲物底板の破片で、楕円形になる。縁辺部を一段低く作り、そこに側板を立てて結合している。４は曲物の側板で、厚さ４mmほどの柾目板を使用しており、綴合部分は薄く削られている。綴合せは、１列綴と２列綴が見られる。８は刳物の破片で、皿形になる。

３号溝

遺　構　掘立柱建物址の集中区の南端を区画する溝で、１号溝同様、その方向は東西に一致している。幅40cm、深さ15cmのＵ字形を呈しており、１号溝とは16.5ｍの間隔を保っている。覆土は粘質土で、10cm前後の石が混入していた。

遺　物　土師器、須恵器と、加工痕のある木片が含まれている。いずれも小片で図示できないが、坏形、甕形土器などがあるようである。

２・４・５・６号溝

遺　構　２号溝は１号溝の上面より検出されたもので、Ｔ字形を呈している。幅は最大で80cmほどであるが、深さは10cmと浅く、部分的に２本並ぶ形になっている。４・５・６号の溝は、調査区南側より、３本並んで検出された遺構で、幅20～30cm、深さ20cmほどのＵ字形を呈する。溝は南へ進むに従って浅くなり、消滅する。３号と４号の溝は直交する溝によって、つながっている。

遺　物　出土遺物はない。

第14図　溝内遺構配置図

その他のピット

今回の調査により検出された掘立柱建物址は９棟であったが、他にも礎板、柱根を持つもの、あるいは一定の配置が見られるものがあった。P_{27}・P_{28}・P_{82}・P_{84}・P_{85}・P_{68}は、東側に開口する「コ」の字状の配列が見られる。いずれも径60cm前後の掘方で、底部には20cmほどの柱根と思われる小穴を持っている。おそらく掘立柱建物址の一部であろう。このほかP_{16}・P_{17}・P_{24}・P_{26}・P_{108}には礎板が，P_{20}には柱根が残っており、何らかの上部構造があったものと思われる。

１号溝の南には2.7m～4.8mの間隔で、５本のピットが並んでいる。径20cm前後の小さなもので、P_{109}には柱根が残っている。またそれよりやや南に並ぶP_{53}・P_{56}には、同じく径20cmほどの柱の表皮が残っている。掘方を持っていないため、直接地中に打ち込まれたものと考えられ、掘立柱建物址群を囲む塀であったと思われる。

その他の遺物（図版４・６・14）

遺物の多くは１号溝より出土したもので、グリッドからの遺物の出土は少ない。

１は内面黒色処理された土師器坏形土器である。２～８は須恵器坏形土器で２～４は回転ヘラ

ピットNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	ピットNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	ピットNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
P_{1}	85×80	24	１号掘立柱建物址	P_{13}	50×50	20	５号掘立柱建物址	P_{75}	不明×60	18	９号掘立柱建物址
P_{2}	70×40	20	〃	P_{14}	50×45	22	〃	P_{76}	100×57	34	〃
P_{3}	42×70	20	〃	P_{54}	30×23	14	〃	P_{76}	54×48	35	〃
P_{4}	82×75	24	〃	P_{55}	40×36	19	〃	P_{78}	80×56	19	〃
P_{5}	57×70	31	〃	P_{57}	41×32	24	〃	P_{82}	50×45	31	〃
P_{6}	80×70	16	〃	P_{65}	46×35	8	〃	P_{88}	70×55	34	〃
P_{7}	70×66	16	〃	P_{29}	72×50	29	６号掘立柱建物址	P_{89}	80×70	30	〃
P_{8}	60×45	13	〃	P_{30}	78×70	37	〃	P_{94}	91×54	33	〃
P_{9}	不明×65	20	〃	P_{33}	83×70	32	〃	P_{16}	47×45	18	礎板あり
P_{10}	65×56	33	〃	P_{79}	70×60	34	〃	P_{17}	58×50	22	〃
P_{11}	80×60	32	〃	P_{80}	70×65	35	〃	P_{18}	55×55	42	
P_{34}	46×42	31	２号掘立柱建物址	P_{87}	74×55	29	〃	P_{19}	105×85	19	
P_{35}	70×55	52	〃	P_{89}	80×70	30	〃	P_{20}	33×28	25	柱根あり
P_{36}	70×65	39	〃	P_{91}	70×58	31	〃	P_{24}	115×80	16	礎板あり
P_{37}	70×60	40	〃	P_{95}	95×70	33	〃　廂？	P_{26}	40×39	26	〃
P_{38}	59×55	43	〃	P_{81}	37×31	23	〃　〃	P_{27}	60×50	24	
P_{39}	60×45	41	〃	P_{93}	70×66	39	〃　〃	P_{28}	58×58	20	
P_{31}	61×53	42	３号掘立柱建物址	P_{96}	65×63	37	〃　〃	P_{51}	70×46	24	
P_{32}	90×80	45	〃	P_{97}	102×69	31	７号掘立柱建物址	P_{53}	29×25	18	
P_{41}	104×45	37	〃	P_{98}	60×56	34	〃	P_{56}	24×23	25	
P_{42}	68×60	41	〃	P_{99}	82×76	44	〃	P_{58}	31×30	18	
P_{43}	85×57	34	〃	P_{111}	55×35	38	〃	P_{68}	42×37	26	
P_{44}	100×72	48	〃	P_{113}	111×90	32	〃	P_{82}	50×45	31	
P_{45}	77×59	22	４号掘立柱建物址	P_{124}	55×30	35	〃	P_{84}	50×40	27	
P_{46}	73×65	27	〃	P_{125}	36×30	29	〃	P_{85}	51×50	30	
P_{47}	70×62	22	〃	P_{126}	26×26	24	〃	P_{108}	55×47	16	礎板あり
P_{48}	100×65	24	〃	P_{127}	30×30	33	〃	P_{109}	24×22	45	
P_{49}	114×80	31	〃	P_{117}	不　明	0	８号掘立柱建物址	P_{110}	38×24	26	
P_{50}	67×57	27	〃	P_{118}	不　明	0	〃	P_{115}	86×84	30	
P_{12}	50×50	35	５号掘立柱建物址	P_{119}	不　明	0	〃	P_{123}			

第１表　おもなピット一覧表

オコシ、５～７は回転糸切り痕が底部にみられる。８は、短かいが強く外へ開くシャープな高台が付けられている。９～12は蓋形の須恵器で、９は薄く直線的に作られている。いずれも作りはていねいである。13は壺形、14・15は高盤形、17は浅い甕形の須恵器である。18は大形の須恵器甕形土器で、推定口径75.5cmを計る。胴部には自然釉が付着しており、平行叩きが見られる。

木製品は調査区南側の不定形の落ち込み付近より出土している。製品となるものは少なかったが、削り屑や加工痕を持たない木片は、多数出土している。９は2.6cm の角材の一端に作られたほぞで、つなぎ合わされて製品となるものであろう。10は右側を欠くが下駄である。花緒孔は前壺を右に寄せてあけ、後壺は歯の内側にあけられている。歯は腐触しており全体が残っていないが、断面は台形に作られている。

Ⅵ　ま　と　め

本遺跡の発掘調査は西部沖県営ほ場整備事業に伴うもので、同事業に係わる本格的な調査は、３年前に実施した北稲付遺跡に次ぐものであった。湿地帯であった北稲付遺跡では、長野県で２例目となる木簡をはじめ多数の木製品の出土があり、自然堤防上の遺跡では究明できない多くの事実を明らかにすることができた。本遺跡も湿地帯にあたり、当初、建物址等の存在は考えてい

遺跡及び遺構名	長軸方向	柱間間数	規　模	備　考
飯山市北原遺跡				
1　号	——	2間×2間	2.2m×2.0m	平　安
2　号	——	2間×2間	3.4m×3.2m	〃
3　号	EW	3間×2間	7.4m×5.3m	〃
4　号	NS	3間×1間	8.0m×5.1m	〃
牟礼村前山遺跡				
配列ピット	N	3間×2間	5.0m×4.3m	平安後~中世
長野市三才田子遺跡				
1　号	北　西	4~5間×2間	×6.0m	奈良～平安
2　号	〃	3間以上×2間	×5.0m	〃
長野市県町遺跡				
	北　東	3間以上×2間	×6.0m	平安以前
	不　明	不　明	不　明	〃
長野市塩崎小学校地点遺跡				
1　号	N-29°-E	3間×1間	10.3m×2.1m	奈　良
2　号	N-25°-E	3間×2間	3.9m×3.4m	〃
3　号	N-38°-E	3間×2間	3.5m×3.2m	〃
更埴市青木遺跡				
1　号	N	4間？×2間	7.0m×4.8m	
2　号	E	1間×1間	2.1m×1.2m	柱痕あり

遺跡及び遺構名	長軸方向	柱間間数	規　模	備　考
更埴市五輪堂遺跡　屋代小学校地点Ⅰ次				
2　号	N-50°-W	3間×2間？	4.1m×3.2m	平　安
3　号	N-40°-W	×2間？	×2.8m	〃
更埴市五輪堂遺跡　屋代小学校地点Ⅱ次				
1　号	N	3間×2間	5.0m×4.2m	平　安
2　号	N	3間×2間	4.8m×3.9m	ベタ柱 〃
3　号	N	3間×2間	6.6m×4.4m	〃　〃
4　号	N	×2間	×4.0m	〃
5　号	N	×2間	×3.7m	〃
更埴市五輪堂遺跡　屋代南高校地点				
1　号	N-74°-W	4間？×2間	5.8m？×3.5m	平　安
2　号	N-97°-W	3間×2間	7.0m×5.0m	〃
3　号	N-96°-W	3間×	6.5m×	〃
更埴市上ノ田遺跡				
1　号	N-30°-E	3間×2間	6.0m×4.5m	平　安
2　号	N-6°-E	2間×1間	3.5m×3.0m	〃
3　号	N-17°-E	3間×2間	4.5m×2.7m	〃
4　号	N-1°-W	2間×1間	3.3m×2.8m	〃
5　号	N-9°-W	3間×2間	5.0m×4.0m	〃
6　号	N-2°-E	3間×2間	4.7m×2.8m	〃
7　号	N-80°-E	2間×1間	3.5m×3.0m	柱痕あり

第２表　北信地方の掘立柱建物址

なかった地籍であったが、試掘調査により検出された溝の調査を進めるにつれ、掘立柱建物址等の存在が確認され、調査団を驚かせた。調査内容について十分な検討がなされていないため、今回の調査から特に注目される点についてふれ、結語としたい。

今回の調査で最も注目される点は、掘立柱建物址の検出である。長野県内における掘立柱建物址の検出は、急速に進む開発事業に伴う緊急調査のためおよそ50遺跡を数え、300棟前後におよんでいる。その中にあって、善光寺平における掘立柱建物址の検出は、８遺跡、31棟とまだ極めて少ない。これらの掘立柱建物址をまとめたものが第２表であるが、その特徴を見ると、時代を同じくする竪穴住居址群に共伴する形で検出されている点が、まず挙げられる。比較的広範囲にわたって調査が実施された、塩崎小学校地点遺跡、五輪堂遺跡についてみると、同時代の住居地域を避けるようにして作られている。しかし竪穴住居址と掘立柱建物址の方向は一致しており、両者は同時に存在したことを物語っている。また両者から出土する遺物によっても、竪穴住居地域と掘立柱建物地域とは、共伴するものであるとの結果が得られている。このようなあり方は全県的に認められるものであり、掘立柱建物址は竪穴住居址群の中にあって少数の建築物であり、特殊機能をもったものとして存在していることは明らかである。次に掘立柱建物址は切り合いや建て替えが少なく、同一場所に長期に渡って営まれなかったのではないかとの理解もあげることができる。しかし三才田子遺跡、塩崎小学校地点遺跡、上ノ田遺跡では、２時期あるいは２回の建て替えがあったと思われる所見が報告されている。

建物址の規模という点を見ると、三才田子遺跡、青木遺跡、五輪堂遺跡に、桁行が４間以上のものが見られるが、これらはいずれも全容がつかめておらず、その実体は明らかではない。全体が把握できたものは、３間×２間12棟、３間×１間２棟、２間×２間２棟、２間×１間３棟、１間×１間１棟となっている。この内、青木遺跡より検出された１間×１間の建物址はあまりにも小規模であり、それ自体建物としては疑問が持たれる。このように検出された掘立柱建物址はいずれも小規模であり、竪穴住居址と共存することと併せ考えれば、その大半は倉あるいは納屋的な機能を持っていたと考えられなくもない。

これらについて、今回の調査結果を見ると、社宮司遺跡はまず掘立柱建物址のみによって構成された遺跡であることをあげることができる。掘方内の礎板の存在、あるいは溝の中から得られた木製品の遺存状態から考えれば、当時からすでに湿地帯であって竪穴住居の構築は無理であったのではないかと思えるのである。佐野川扇状地上で竪穴住居の構築が可能なのは、わずかな微高地と、扇頂部に位置する現『郡』（コオリ）集落の存在する地域のみではないかと思われ、発掘調査を実施した周辺では、およそその存在を考えることはできない。

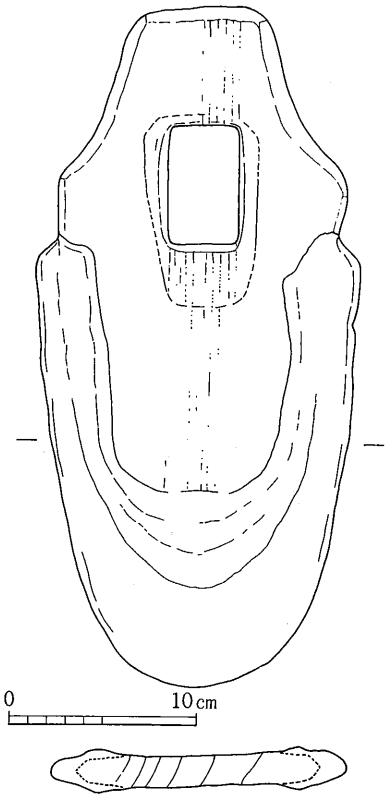
検出できた掘立柱建物址は９棟であったが、他に柱根・礎板を持つ掘方があり、少なくとも10数棟の掘立柱建物址があったと理解できる。また遺跡が調査区外へとのびていることも考えれば、かなりの数にのぼるのではあるまいか。これらの掘立柱建物址は、その重なりから少なくとも４期に分けられるが、掘方に切り合いが見られないため、前後関係は明らかでない。そこでそれを

知る手段として掘立柱建物址の構造を見ると、北側の３棟はいずれも２間×１間の小形の建物址で、南側は３間以上の建物址となっている。これは母屋と倉（納屋）の関係と見ることが可能ではなかろうか。ではその関係がどうであったかということになるが、まず２号・７号・９号の掘立柱建物址のセットが考えられる。その積極的な視点は、建物址の軸が一致していること、そして掘方内に礎板を持っていないという共通した構築構造を持っているので、おそらく同時に存在したと考えてよい。他の掘立柱建物址は、その方向は僅かずつ異っていて一致するものはない。しかし掘立柱建物址の配置から考えれば、１号と３号、６号と４号の組み合わせが考えられる。だがこれらの掘立柱建物址はすべて礎板を持っており、特に母屋となる１号と６号の礎板の使い方がまったく同じであることから、両者には大きな時間差はないと思われる。残った５号と８号は、その全体が把めておらず不明であるが、５号は掘方が小さく柱根も貧弱であることから、新しくなるのではないだろうか。掘立柱建物址を区画している溝との関係を見るならば、２号・７号・９号が一致している。したがってまず溝と同時にこれらの掘立柱建物址が作られ、後に１号と３号、あるいは６号と４号が作られたと思われる。しかし母屋と倉(納屋)という配置は変わっておらず、継続して営まれていたものではないかと理解しておきたい。

これらの掘立柱建物址が構築された時代であるが、掘立柱建物址の掘方などには時代を決定できる遺物はなく、溝の資料に頼らざるをえない。それによると上限は、須恵器坏形土器の形状及び底部調整、三彩陶器の存在から、８世紀の中葉が考えられ、下限は高台を持つ土師器坏形土器、須恵器坏形土器の形状から、９世紀後半までを考えたい。遺物の総体的な集中を見ると、８世紀後半から９世紀初頭にあたる。また今回の調査により検出された掘立柱建物址の掘方には、柱根が残るものが多く、その柱間を測定すると、より天平尺に近いという結果が得られた。しかし本遺跡の掘立柱建物址の特徴である中間の柱間が広くなる建物は、奈良時代のそれには殆んど見られないということである。両者を考え合わせればやはり遺物の集中する時代とほぼ一致するとみておきたい。

以上簡単に述べてきたが、本遺跡の掘立柱建物址は、奈良時代中葉から平安時代前半に営まれたものであり、善光寺平の他の遺跡とは異なり、倉（納屋）としての機能をもつものばかりでなく、他の機能、たとえば住居としての機能もあったと考えておきたい。

木製品の中からは鍬の身があげられる。木目に沿って割れているが、鍬の風呂にあたる部分である。これを鍬と断定し



第15図　本誓寺遺跡出土の鍬(部分)

たのは、更埴市本誓寺遺跡より出土した鍬の風呂（第15図）に酷似しているからである。全国的にみてもこの時期に比定される鍬の出土例は少なく、鉄刃の着装部が作り出されている例を見知していない。着装部はU字状をなすと思われ、その断面は50度ほどの角度を持ったV字状に作られている。このような形状はいわゆる鋤、鍬頭の着装部とも一致しており、今後両者の分類が可能になっていくかもしれない重要な資料と言える。

三彩陶器の出土も注目される。口径4.7cmほどの小壺の蓋でつまみを失ってはいるが、釉は緑を基調に黄、白が配されている。鉄分が付着しており優品とはいえないが、その検出の意義は極めて大きい。近年県内における緑釉陶器の出土は、飯田市恒川遺跡、塩尻市吉田川西遺跡をはじめかなりの数にのぼっているが、多彩陶器となるとその数は極端に少ない。二彩陶器を含めても、佐久市中道遺跡、箕輪町中道遺跡、上田市信濃国分寺址、松本市下神遺跡にすぎない。これらは古代東山道沿い、あるいは国府付近にあたり、当時信濃の中心地としての役割を果していた地域でもある。当遺跡が古代東山道と北陸道を結ぶ支道沿いにあたるのも、交通関係遺跡として共通している。ちなみに下神遺跡も社宮司遺跡にもすぐ隣接して中道地名が存在することは注目すべきで、そこから得られている資料が小形壺との性格を一にしているのも注意されるのである。また先にふれたように、北西700mほどには『郡』（コオリ）と呼ばれる集落があり、その名の起りは古代郡衙にあたるものとして、更級郡の郡衙を求める説もある。今回の調査結果に北稲付遺跡の木簡、青木遺跡の瓦等を総合して考えれば、ここ八幡地区の重要性をうかがうことができる。いずれにしても三彩陶器の出土は、遺跡の性格、特に掘立柱建物址群のみによる構成というその遺跡の性格究明において大きな手掛りとなることは確かであろう。

八幡社宮司遺跡の性格は上に述べて来たようにおそらくは、一つとして古道に関する何等かの役割を果したものと見ることは可能であろう。その出土遺物の組成からして、おそらくはそうした観点を可能にしている。しかし、土師器の出土、とりわけ甕形土器の出土がほとんどみられなかったことは、その遺構がすべて掘立建物をもって構成されていることと明確にかみ合っているものと見ることができるかとも思われる。それが単なる農村集落の一隅ではないこと、何等かの支配的位置にあった建物群の遺構としての性格を表現していることは重要である。奈良の中・後葉期には文献的にも―更級郡の建部大垣が親に孝あり―として賞せられるとの記事と対応する時期でもあり、オバステ伝説や月の名所としての歌枕として定着してくる時期でもあることは注意されるべきである。今度、そうした意味でこの地方における、また多くの課題が蔵されていることを思うと、もう一つの遺跡の性格として、特殊な役割をもった地域であることの認識を引き出さなければならないものと思われる。柱根を遺すということは、それ自体として建物は建ったまま廃絶されたことを意味するのであろうから、そうした意味でも、もう一つの課題が残されているとみるべきである。

このような成果を残すことができたのは、東信土地改良事務所、西部沖県営ほ場整備西沖委員会、調査に参加くださったみなさまの御協力と努力の賜であり、心から御礼申し上げます。

社宮司遺跡の地質について

信濃町立野尻湖博物館
中　村　由　克

社宮司遺跡の遺物包含層の下位に植物化石を多く含む泥炭層が発見された。地質の概要とその堆積環境について若干の解説をのべる。礫層中の礫種と周辺の地質について御教示いただいた、大阪市立大学地学教室の木村純一氏に厚くお礼を申しあげる。

１、地質層序

遺構の１ｍ南側（01）では、下位により灰白色粘土や淡青灰色砂質シルトをはさむ泥炭層、灰白色シルト層、暗褐色シルト層（この中ほどに生活面がある）、黒褐色土、耕土という層序が観察される。約80ｍ北方の水路（02）では、泥炭層が細礫まじり砂層の薄層と互層しており、その上部は礫層となっている。種子化石をはじめとする有機物は、上位２枚の泥炭質のシルト～砂層に多く認められる。遺跡より約100ｍ東方の水路（03）では泥炭層の下位に礫層が発達している。

このように、遺跡付近には遺物包含層をふくむシルト層の下に泥炭層が拡がっており、場所によって泥炭層の上下の層準に礫層が発達している。ただし礫層の分布はせまいようである。

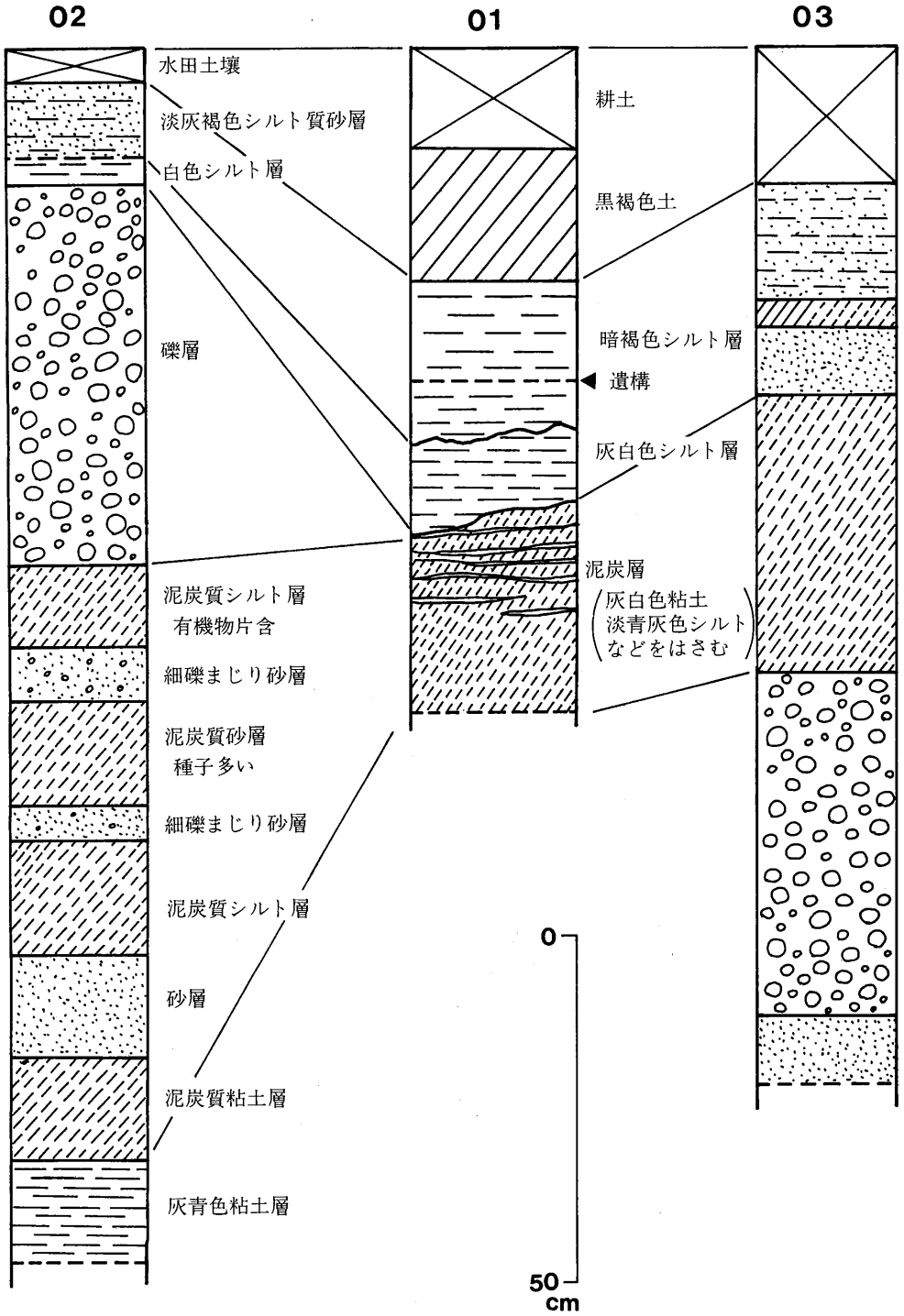
遺跡より約600ｍ北東方の八幡小学校のボーリング資料によれば、－15～－27ｍ付近を境にＮ値等にちがいがみられ、上位地盤と下位地盤に区分されている（中部地質、1979）。下位地盤はシルトまじり砂礫層で、Ｎ値30～50以上という値を示し、北西→南東方向にゆるい傾斜をしており、被圧地下水帯となっている。上位地盤は随所に薄い礫層をはさむ有機質～砂質のシルト層で、Ｎ値は平均20～30以下である。とくに表層の深いところでは－８ｍ、浅いところで－３ｍぐらいまではＮ値５以下の軟弱地盤となっている。

２、堆積環境と年代

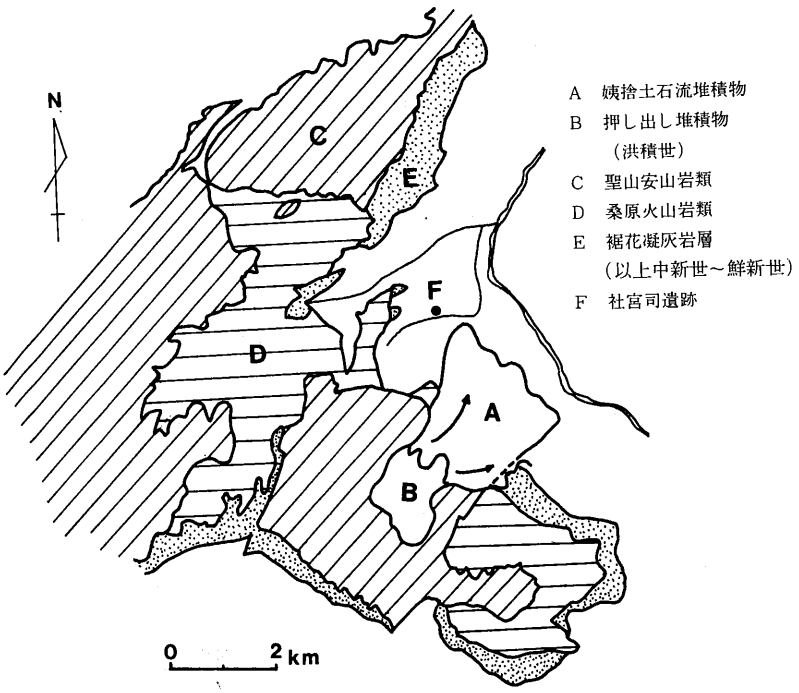
02地点の礫層中の礫種を検討したところ、下記のとおりである。

聖山火山岩類下部起源の黒色安山岩
桑原火山岩類中部起源の変質した灰～青灰色安山岩
桑原火山岩類下部起源のいちじるしく変質した安山岩（流紋岩？）
桑原火山岩類に貫入したヒン岩
裾花凝灰岩中の貫入岩

これらの岩石は佐野川沿いに多く分布するが、すぐ後背の宮川沿いの山地にもふつうに産するものである。礫径は１～８cm程度の円～亜円礫から構成され、基質はシルト質砂層である。礫種



第16図　社宮司遺跡の地質



第17図　社宮司遺跡周辺地質図（木村1983より作成）

からみると千曲川系のものではなく、また淘汰がよいこともあわせると佐野川系の礫層と考えられる。

遺跡のすぐ南方には姨捨土石流堆積物が厚く堆積している。その末端付近(遺跡より約600mと1000m南東方）のボーリングで得られた木片のC^{14}年代によれば、－35.5mで13,550±460Y.B.P.，－29.7mで3,250±260Y.B.P.という値が報告されている（斎藤)。絶対年代値からも姨捨土石流堆積物は洪積世末～沖積世にかけての土石流であるが、この流下によって八幡の扇状地内にも微高地が形成され、それより西方の遺跡付近は後背湿地的な環境となり、泥炭層などの細粒堆積物がたまったものと考えられる。

八幡小学校ボーリングの〝下位地盤〟は姨捨土石流下部の年代とも関連して洪積世の地層と考えられる。また〝上部地盤〟は姨捨土石流上部に対比され、沖積層だと判断される。したがって、〝上部地盤〟の中でもごく浅いところに発見された社宮司遺跡の泥炭層は、沖積世（完新世）でも比較的若い年代（約3000年前より以降？）に属すと推定される。

引用文献

中部地質（1979）更埴市立八幡小学校改築工事地質調査

木村純一（1983）更埴市千曲川左岸の地質・地団研ほか編
「信州の地質構造発達史をめざして」2，5－7

斎藤　豊（1982）長野県の姨捨土石流堆積物の成因とその形成期、地すべり、19，2，1－5

社宮司遺跡花粉分析報告

信州大学理学部地質学教室
酒　井　潤　一

Ⅰ　試料

社宮司Ⅰから10個、社宮司Ⅱから７個の試料を採取した。採取した試料は泥炭質シルトまたは、泥炭質細～中粒砂である。

Ⅱ　分析方法

① 試料20～50ｇに10％KOH溶液を加え、48時間放置
② 10％HCl で中和し、48時間放置
③ 60メッシュの篩をとおす
④ ２ℓビーカーで、12時間おきに水洗（10回）
⑤ 500ccコニカルビーカーに移し、10％KOHを加え、湯煎（７分間）
⑥ 90分おきに水洗（30回）
⑦ 70％$ZnCl_2$溶液で遠心分離（1500回転／分，10分間）（２回）
⑧ 水洗（３回）
⑨ HFを加え、24時間放置
⑩ 水洗（３回）
⑪ アセトリシス処理（濃硫酸：無水酢酸＝１：９の混合溶液を加え、60秒湯煎）
⑫ 水洗（３回）
⑬ グリセリン・ゼリーで封入
⑭ マニキュアで密封

Ⅲ　検鏡

生物顕微鏡を用いて、600倍、必要に応じて油浸1500倍で検鏡した。木本花粉（AP）が200個をこえるまで検鏡することを原則とした。17個の試料すべてから、花粉化石が検出された。

各タクサの出現率（百分率）は $\dfrac{\text{各タクサの花粉数}}{\text{木本花粉総数}+\text{草本花粉総数}}\times 100$ で計算し、花粉ダイアグラムに表わした。

Ⅳ　検鏡結果

(1)　社宮司Ⅰ

全般的に、針葉樹よりも落葉広葉樹及び草本花粉が多いことが特徴である。

針葉樹の花粉は、*Abies*（モミ属）、*Pinus*（マツ属）が比較的安定して出現する。*Abies*は、試料8から試料3にかけて10～20%出現するが、下部と上部では数%以下となる。

*Pinus*は二葉型（*Diploxylon*）か五葉型(*Haploxylon*)か判定できないものが多いが、少量ながら、確実に二葉型が出現し、五葉型は検出されないことから、*Pinus*は、ほとんど二葉型（この場合はアカマツ）であろうと推測される。

広葉樹は、大部分のタクサが落葉広葉樹であることが特徴であるが、きわめて少量ながら常緑型の*Cyclobalanopsis*（アカガシ亜属）が出現する。比較的高率で、安定して出現する落葉広葉樹は、*Juglans*－*Pterocarya*（オニグルミ属あるいはサワグルミ属），*Alnus*(ハンノキ属)、*Betula*(カバノキ属)，*Carpinus*（クマシデ属），*Fagus*（ブナ属），*Quercus*（コナラ亜属），*Ulmus*－*Zelkova*(ニレ属あるいはケヤキ属）であり、*Aesculus*（トチノキ属）は上部の試料3～1で多い。

草本の花粉化石は、Gramineae(イネ科)，Cyperaceae(カヤツリグサ科)，*Artemisia*(ヨモギ属)，Carduoideae(キク亜科）が高率である。これらは、一般的に、上部に向かって低率となる。Gramineaeは小型のものが多いこと、上部に向かって減少することなどから、栽培種のイネは含まれていないものと推定される。また、*Fagopyrum*（ソバ属）は検出されなかった。

結論として、当時の社宮司一帯には、ブナに代表される山地帯の落葉広葉樹を主とし、アカマツやモミなどの針葉樹を混えた森林が拡がり、その間に、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本を主とする荒地が点在していた。これは、調査地一帯が、まだ形成途上の扇状地であったことと符合している。

また、ブナが比較的高率で、安定して出現することから、人為による植生の大規模な破壊（開墾や焼畑など）は、まだ始まっていないと判断される。

(2)　社宮司Ⅱ

試料7と6の間には、軽微な不整合または時間間隔が存在する。しかし、花粉組成のうえからは、自然環境の変化はみられない。すなわち、主な落葉広葉樹及び針葉樹の花粉出現傾向は、社宮司Ⅰとほとんど同じである。ただ、人間の生産活動という点からみると、興味深いことが2点ある。一つは、全試料から*Fagopyrum*(ソバ属）が検出されることである。もう一つは、Gramineae（イネ科）がきわめて高率となり、しかも大型の花粉（50μ）が混ってくることである。試料3～1では大型のGramineaeが特に多い。一般に、栽培種のイネは花粉が大きいと言われている。

上述の点から、社宮司Ⅱの時代には、ソバとイネの栽培が行われていたと推定される。特に、花粉分析結果からのみ、結論を出すとすれば、ソバの栽培は100%確実である。

自然環境に関しては、ソバやイネの栽培が行われていても、自然の植生を大きく破壊するほど、大規模なものではなかったと考えられる。それは、あいかわらず*Fagus*（ブナ属）が10%前後の高

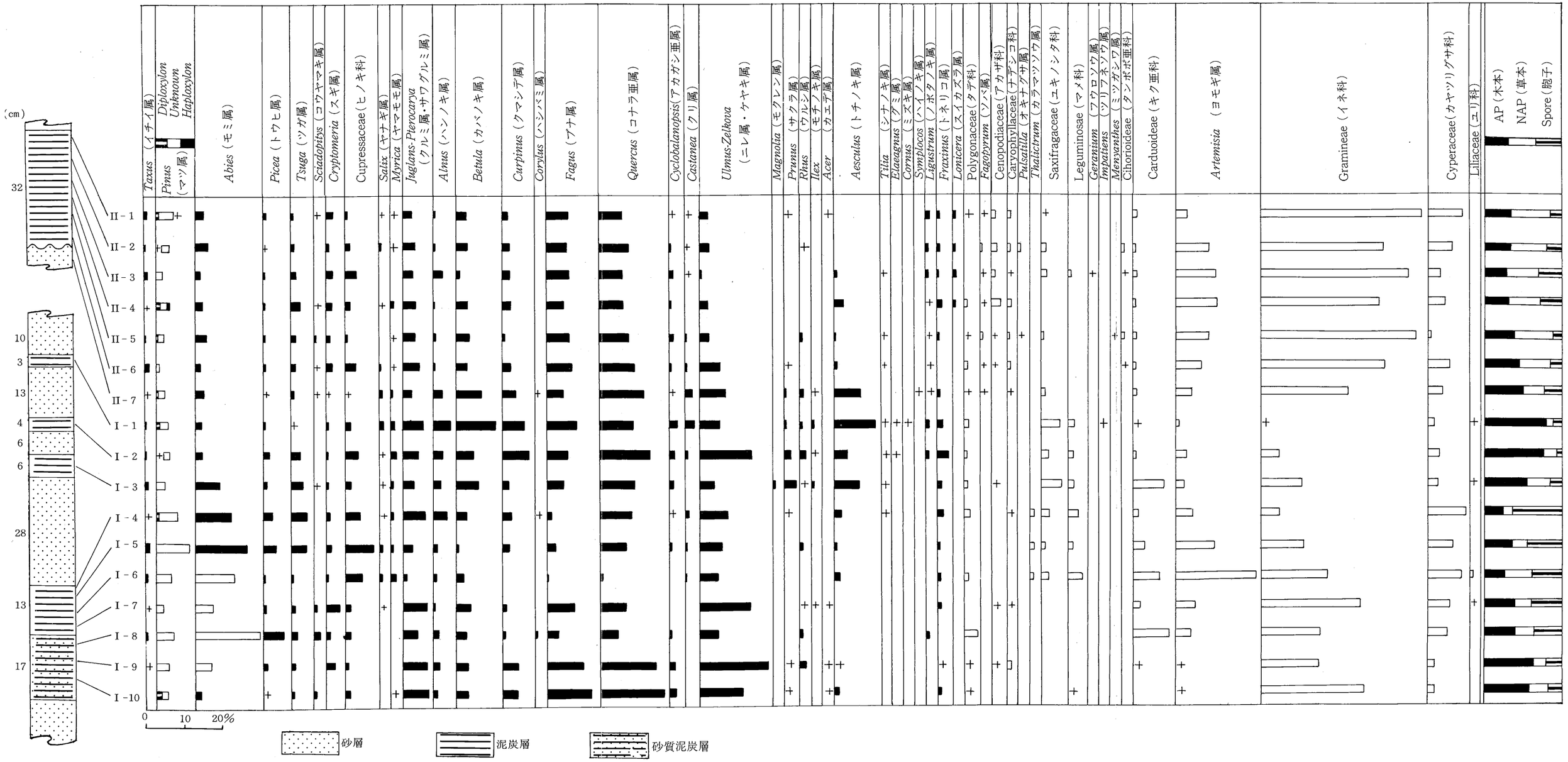
率で出現しているからである。

V　社宮司Ｉと社宮司IIの関係

社宮司IIが社宮司Ｉの上位になる（新しい）ことは、層位学的にも、花粉組成の点からも確実である。社宮司IIの試料７と６の間には、時間間隔がはさまれる。すなわち、試料７よりももっと上位にまで堆積していた地層が削られて、その後に、試料６以上の地層が堆積している。問題は、社宮司II－７と社宮司Ｉ－１との関係である。この点に関しては、社宮司II－７の方が上位にある（新しい）と判断される。その理由は、社宮司II－７には、① *Fagopyrum*（ソバ属）が含まれること、②Gramineae（イネ科）が高率であり、試料６以上と調和的であるのに対し、社宮司ＩではGramineaeは上部に向かって減少しており、II－７とは非調和である。とは言え、II－７とＩ－１の時間間隔は、ごく小さいと推測される。なぜなら、針葉樹や落葉広葉樹の花粉組成は、両者の間で変化しないからである。同様に、社宮司II－７と６の間の間隔も大きくはない。

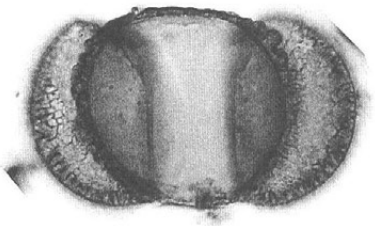
花粉化石			II-1	II-2	II-3	II-4	II-5	II-6	II-7	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	I-8	I-9	I-10
Taxus		イチイ属	1.1	0.9	1.1	0.3	0.7	1.6	0.4	0.6	0.6	1.6	0.4	1.4	1.2	0.4	0.6	0.4	
Pinus	*Diploxylon*	マツ属 複維管束亜属	1.1	0.3		1.1	0.9		0.7	1.0	0.3		0.8						1.4
	Unknown	不明	3.9	1.7	2.2	2.0	1.6	1.3	2.5	2.5	1.6	2.5	5.2	8.7	4.0	2.0	5.0	3.6	1.8
	Haploxylon	単維管束亜属	0.3			0.6													
Abies		モミ属	3.1	4.6	2.2	2.9	3.7	2.1	3.2	2.5	2.6	6.9	10.4	14.2	11.0	5.2	17.7	4.7	2.2
Picea		トウヒ属	1.1	0.3	0.8	1.1	0.9	1.1	0.4	1.0	2.2	1.6	2.8	3.7	0.6	0.8	5.5	1.2	0.4
Tsuga		ツガ属	1.1	1.4	1.9	2.9	1.8	1.8	1.4	0.3	2.9	3.8	4.8	4.6	0.6	1.2	2.2	1.4	0.7
Sciadopitys		コウヤマキ属	0.3			0.3	0.5	0.3	0.4			0.3				1.2	2.2		0.7
Cryptomeria		スギ属	2.3	1.4	2.5	2.3	1.6	2.4	0.4	1.0	1.0	0.9	1.6	1.8	0.6	4.0	1.7	2.8	
Cupressaceae		ヒノキ科	1.1	2.0	3.6	2.0	1.4	3.4	0.4	2.2	3.8	2.2	4.4	7.8	5.2	2.0	2.2	1.2	1.8
Salix		ヤナギ属	0.3	0.9		0.3		0.5	1.1	1.6	0.3	0.3	0.4	0.9	0.6	0.4			
Myrica		ヤマモモ属	0.3	0.3		0.6	0.2	0.3	0.7	1.6	1.9	0.6	0.8	0.5	1.7				0.4
Juglans-Pterocarya		クルミ属・サワグルミ属	3.1	4.3	3.8	4.0	4.3	5.8	2.9	6.1	4.8	3.8	6.4	3.2	1.7	6.8	4.4	6.7	6.9
Alnus		ハンノキ属	0.6	0.6	3.0	0.6	1.1	0.8	3.2	5.1	2.9	2.5	4.4	1.4	1.2	0.8	1.7	2.0	1.4
Betula		カバノキ属	3.1	3.7	1.6	3.7	3.9	3.2	7.1	10.5	5.4	6.3	3.2	0.5	2.3	4.0	2.8	3.6	3.3
Carpinus		クマシデ属	1.7	2.3	2.2	2.6	1.1	2.6	3.6	5.7	7.0	1.9	2.4	1.8		1.2	1.1	4.0	4.0
Corylus		ハシバミ属							0.4				0.4				0.6		
Fagus		ブナ属	6.2	6.3	6.3	5.2	6.4	7.4	5.0	8.6	6.1	4.7	1.6	2.7	0.6	7.6	3.3	9.9	12.3
Quercus		コナラ亜属	6.2	8.0	6.3	6.6	8.2	9.5	12.1	8.9	13.7	9.4	8.4	6.8	1.2	7.2	5.0	15.4	17.0
Cyclobalanopsis		アカガシ亜属	0.3	0.9	1.6	0.9	1.6	0.8	0.4	2.5	2.2	1.3	0.4	0.5			0.6	2.0	2.2
Castanea		クリ属	0.3	0.3	0.3		0.5	0.8	2.5	2.9	1.3		1.2	0.5	0.6				
Ulmus-Zelkova		ニレ属・ケヤキ属	2.5	2.8	0.5	2.6	2.5	5.5	7.1	5.4	14.1	4.1	7.6	5.9	4.6	14.5	5.0	18.2	11.6
Magnolia		モクレン属										0.6							
Prunus		サクラ属	0.3					0.3	0.7	0.6	1.9	3.4	0.4					0.4	0.4
Rhus		ウルシ属		0.3			0.7		1.1	0.6	1.6	0.3		0.5		0.4	0.6	1.6	
Ilex		モチノキ属							0.4	1.0	0.3	0.6				0.4			
Acer		カエデ属	0.3													0.4		0.4	0.4
Aesculus		トチノキ属			1.1	2.9	0.5	1.1	7.1	11.1	3.5	6.6	2.0	0.5	1.7			0.4	1.1
Tilia		シナノキ属			0.3		0.2	0.3		0.3	0.3	0.3	0.4						
Elaeagnus		グミ属								0.3	0.3								
Cornus		ミズキ属								0.3									
Symplocos		ハイノキ属							0.4										
Ligustrum		ノボタノキ属	1.1	0.9	0.5	0.3	0.2	0.3	0.4	0.6	0.6						1.1		
Fraxinus		トネリコ属	0.6	0.9	0.5	1.7	0.9		0.7	1.6	2.9	1.3	1.6	0.5	0.6	0.8		0.4	0.7
Lonicera		スイカズラ属	0.6	0.6	0.8	0.6													
Polygonaceae		タデ科	0.3			0.6	0.2	0.8	0.4	1.3	0.6	0.6	1.2		0.6		3.3	0.4	0.4
Fagopyrum		ソバ属	0.3	0.6	0.3	0.3	0.5	0.3	0.4										
Cenopodiaceae		アカザ科	0.6	1.7	0.8	2.3	0.2	0.3				0.3				0.4		0.4	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	0.6	0.9	0.3	1.1	0.9	0.5	0.4				0.4			0.4		0.8	
Pulsatilla		オキナグサ属		0.9			0.2												
Thalictrum		カラマツソウ属											0.8	0.5	0.6				
Saxifragaceae		ユキノシタ科	0.3	1.4	1.6		0.7		0.7	4.8	1.9	5.3	2.0	0.9	1.7				
Leguminosae		マメ科			0.5					1.6	1.6	1.6	2.4	0.9	3.5				0.4
Geranium		フウロソウ属			0.3														
Impatiens		ツリフネソウ属								0.3									
Menyanthes		ミツガシワ属					0.2												
Cichorioideae		タンポポ亜科		0.6	0.3		0.7	0.3											
Carduoideae		キク亜科	0.6	0.9	0.5	0.6	0.5	0.5	0.7	0.3	0.6	8.1	1.2	2.7	6.9	1.6	9.4	0.4	
Artemisia		ヨモギ属	3.1	9.2	10.7	10.9	8.9	6.6	4.3	0.6	2.9	2.2	4.4	9.6	20.8	4.8	4.4	0.4	0.4
Gramineae		イネ科	41.7	31.9	38.2	30.9	40.4	32.0	22.5	0.3	4.5	10.6	4.8	11.0	16.8	25.3	14.9	14.6	26.4
Cyperaceae		カヤツリグサ科	9.9	6.3	3.3	5.4	1.1	6.0	3.9	1.9	3.2	2.8	10.4	6.4	8.7	5.6	5.0	2.0	1.8
Liliaceae		ユリ科								0.3		0.3			0.6	0.4			
AP			36.1	37.1	30.5	34.4	40.6	45.1	50.4	78.5	78.6	56.9	24.5	36.0	26.2	36.5	39.2	63.7	58.4
NAP			48.2	44.2	40.2	37.5	48.8	40.4	25.1	10.2	14.2	26.6	9.4	16.9	39.5	22.9	23.0	14.9	24.3
Spore			15.7	18.7	29.4	28.0	10.6	14.6	24.5	11.3	7.1	16.4	66.1	47.1	34.2	40.6	37.8	21.4	17.4

第3表　社宮司遺跡の花粉化石の頻度表



第18図　社宮司遺跡における花粉ダイアグラム

1　*Abies* モミ属，165μ（本体140μ）



2　*Pinus* マツ属，87μ（本体55μ）

3　*Tsuga* ツガ属，82μ

4　*Cryptomeria*
スギ属，39μ

5　*Pterocarya*
サワグルミ属，48μ

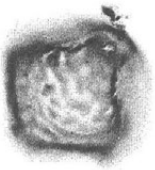
6　*Fagus*
ブナ属，46μ

7　*Fagus*
ブナ属，40μ

8　*Quercus* (*Lepidobalanus*)
コナラ亜属，40×35μ

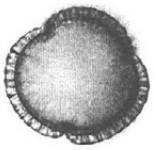
9　*Carpinus*
クマシデ属，35μ

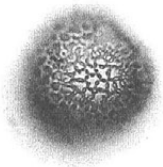
10　*Betula*
カバノキ属，30μ



11　*Ulmus-Zelkova* ニレ属
またはケヤキ属，40μ

12　*Castanea*
クリ属，20×13μ





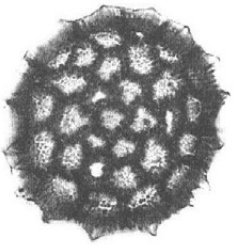
13・14　*Ligustrum*
イボタノキ属，35μ

第19図　社宮司遺跡出土の花粉化石（×500）

15 *Fagopyrum*
ソバ属，52×33μ

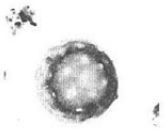
16 *Fagopyrum*
ソバ属，45×33μ

17 *Fagopyrum*
ソバ属，51×30μ



18 Polygonaceae
タデ科，65μ

19 Caryophyllaceae
ナデシコ科，37μ



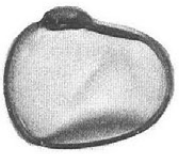
20 Chenopodiaceae
アカザ科

21 *Thalictrum*
カラマツソウ属，23μ

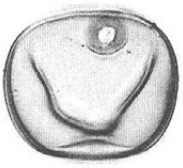
22 Cichorioideae
タンポポ亜科，30μ

23 Carduoideae
キク亜科，32μ

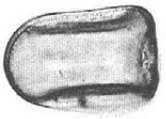
24 *Artemisia*
ヨモギ属，25×22μ



25 Gramineae
イネ科，45μ



26 Gramineae
イネ科，45μ

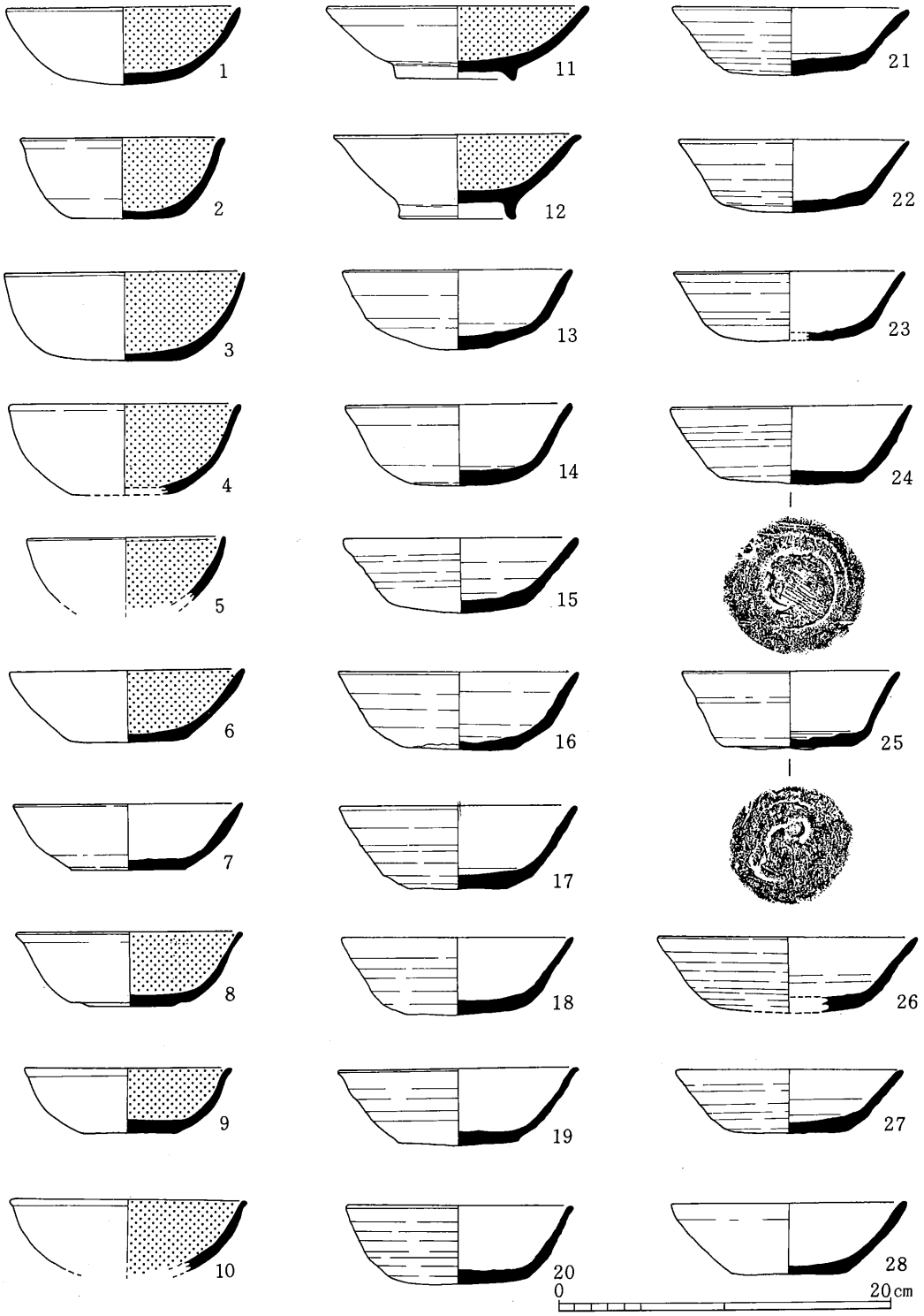


27 Cyperaceae
カヤツリグサ科，40×27μ

第20図　社宮司遺跡出土の花粉化石（×500）

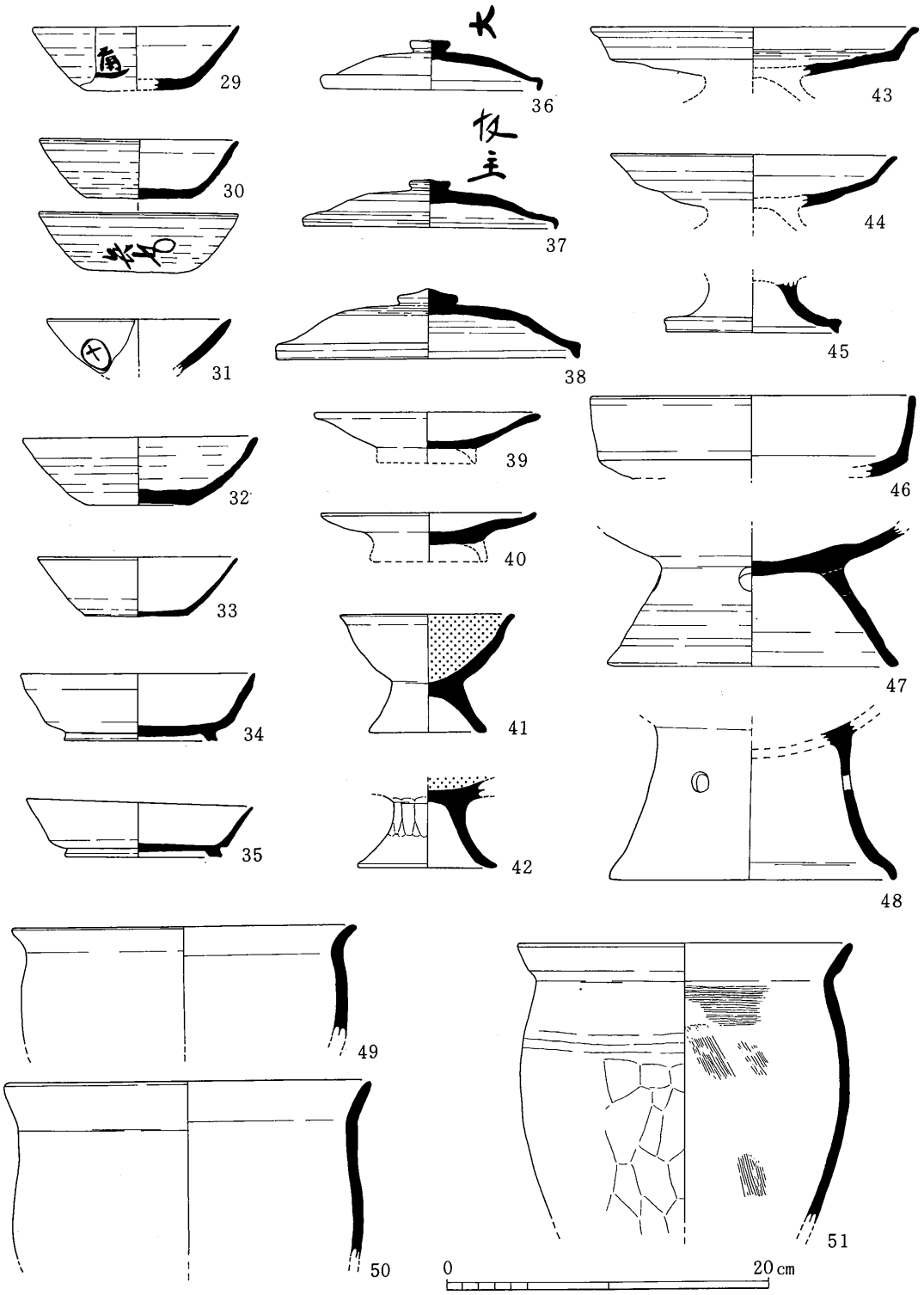
図版　1

1号溝出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
20cm

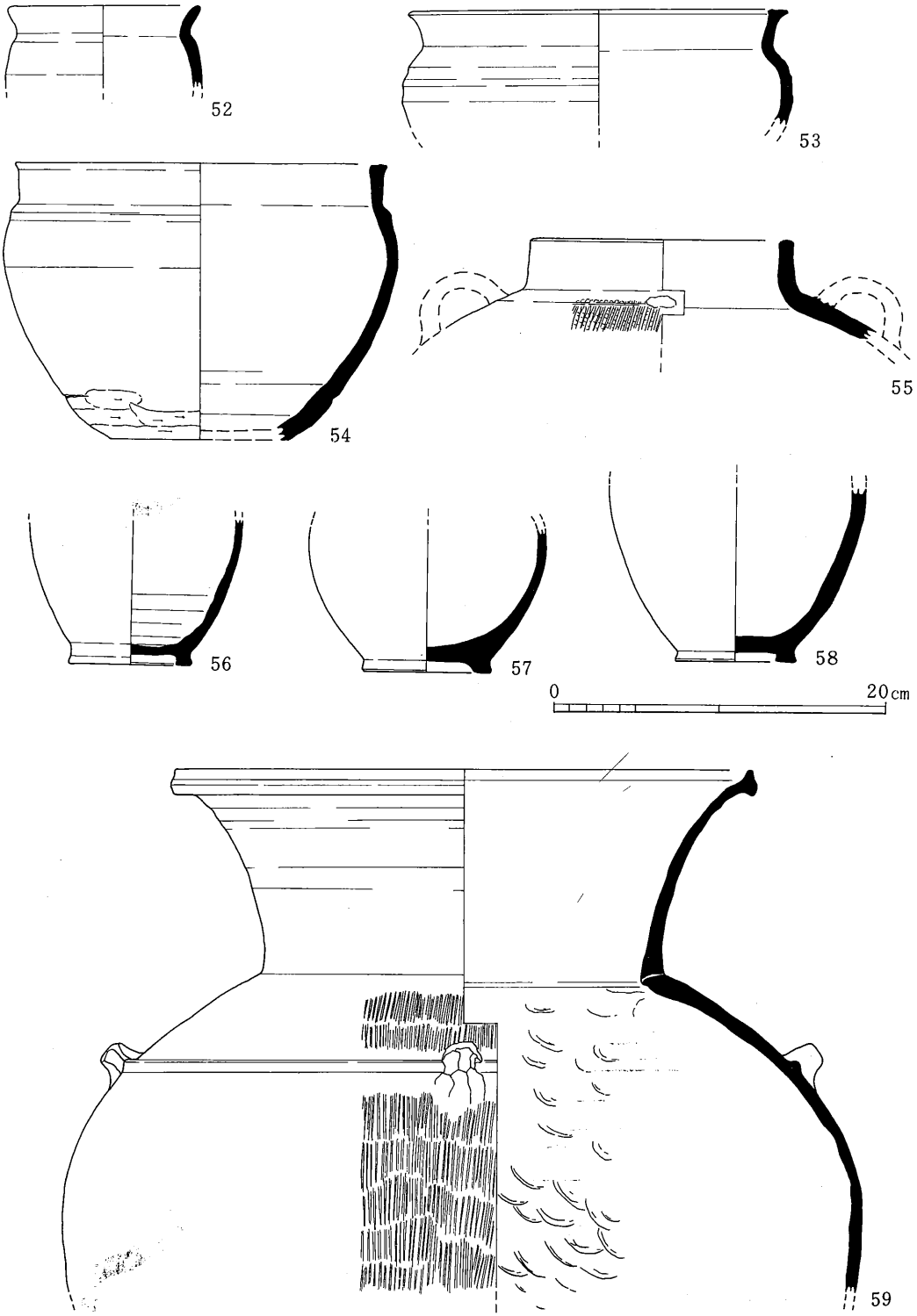
図版　2

1号溝出土遺物


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
20cm

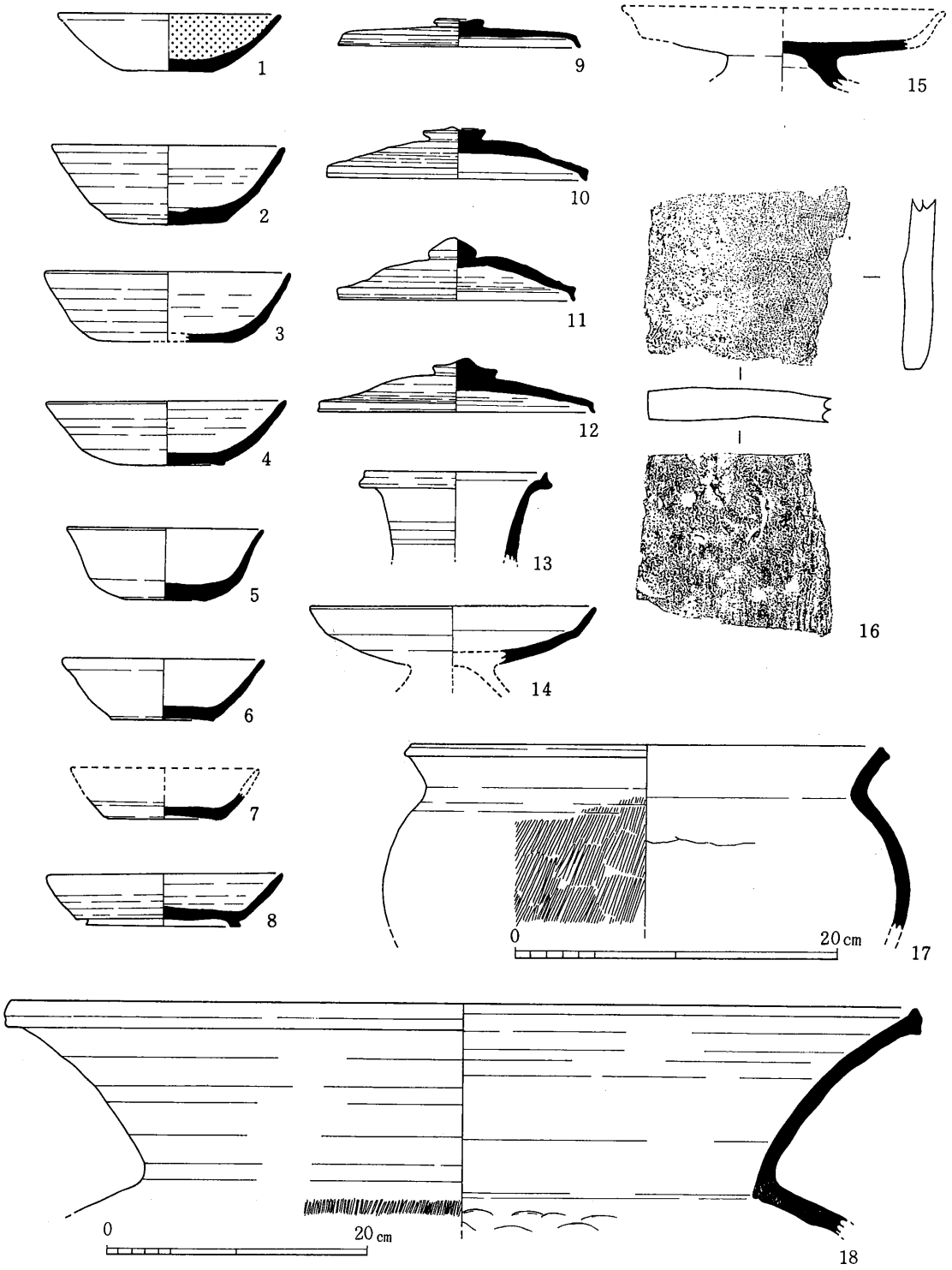
図版　3

1号溝出土遺物



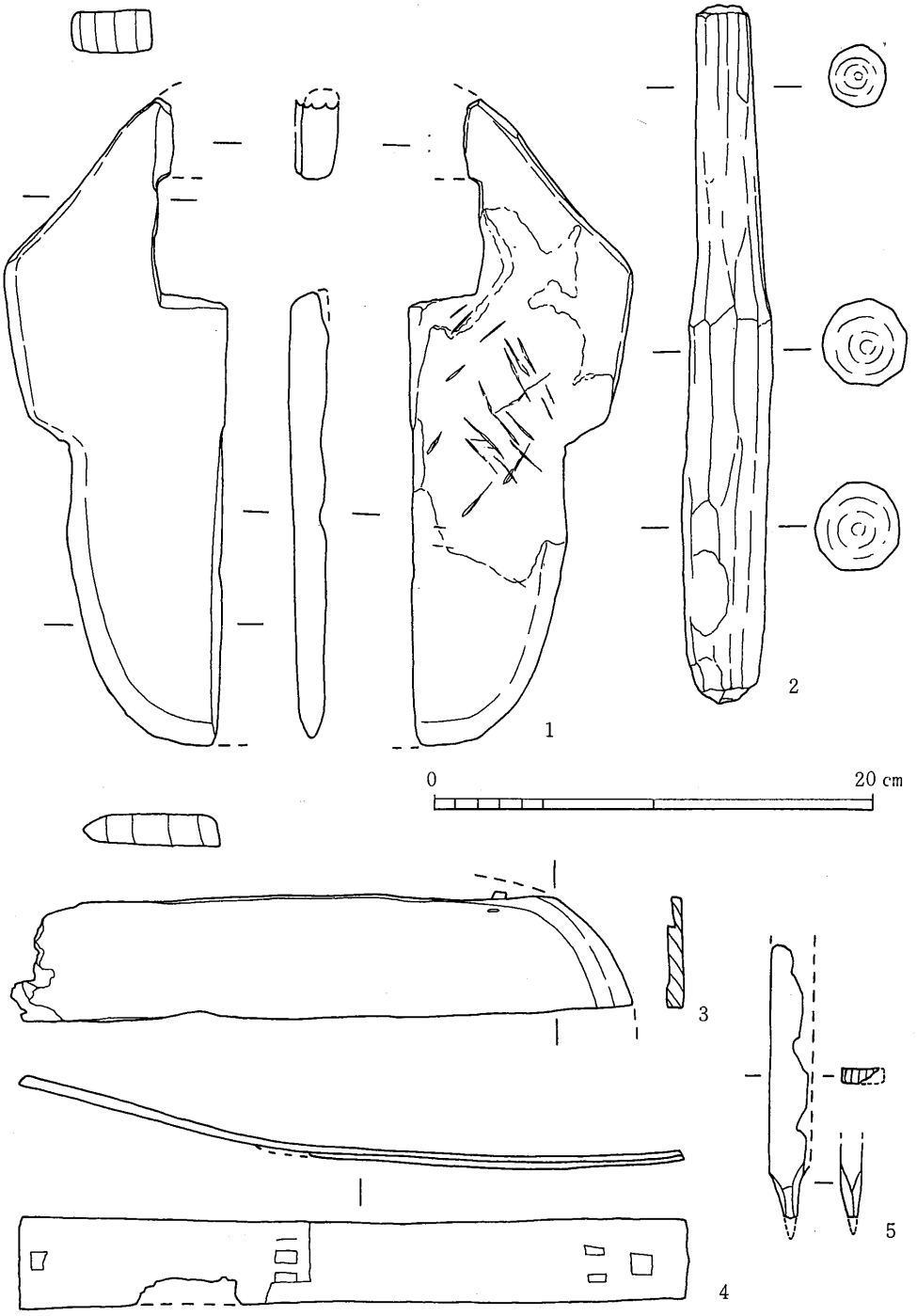
図版　4

1号溝及びグリッド出土遺物



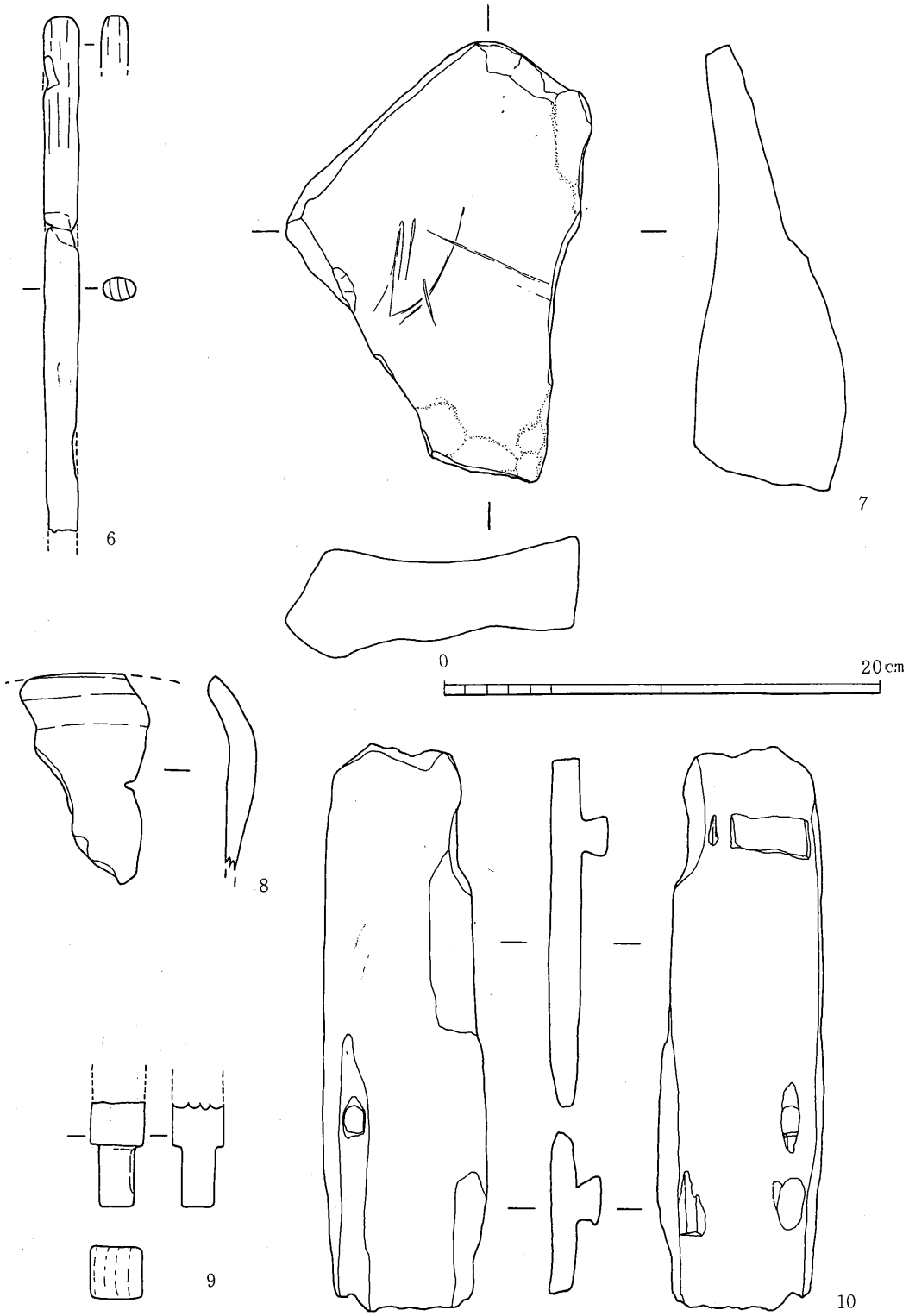
図版　5

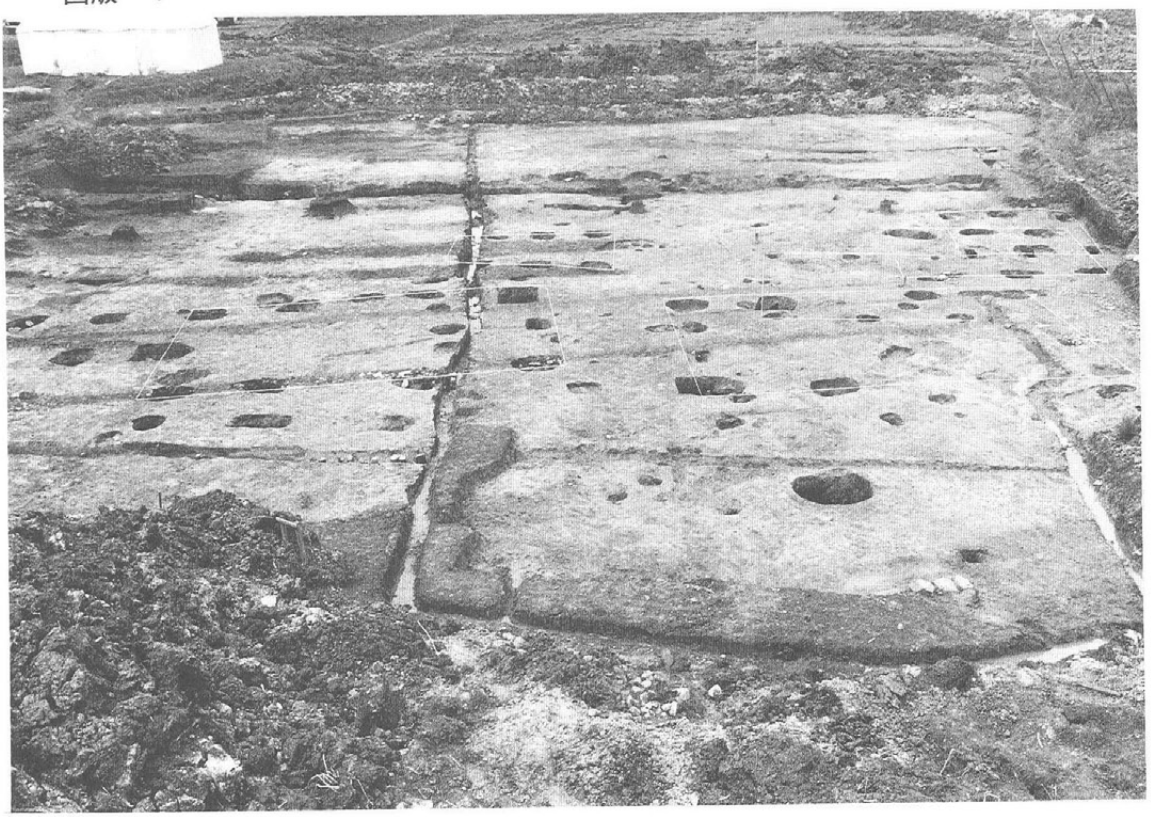
1号溝出土遺物



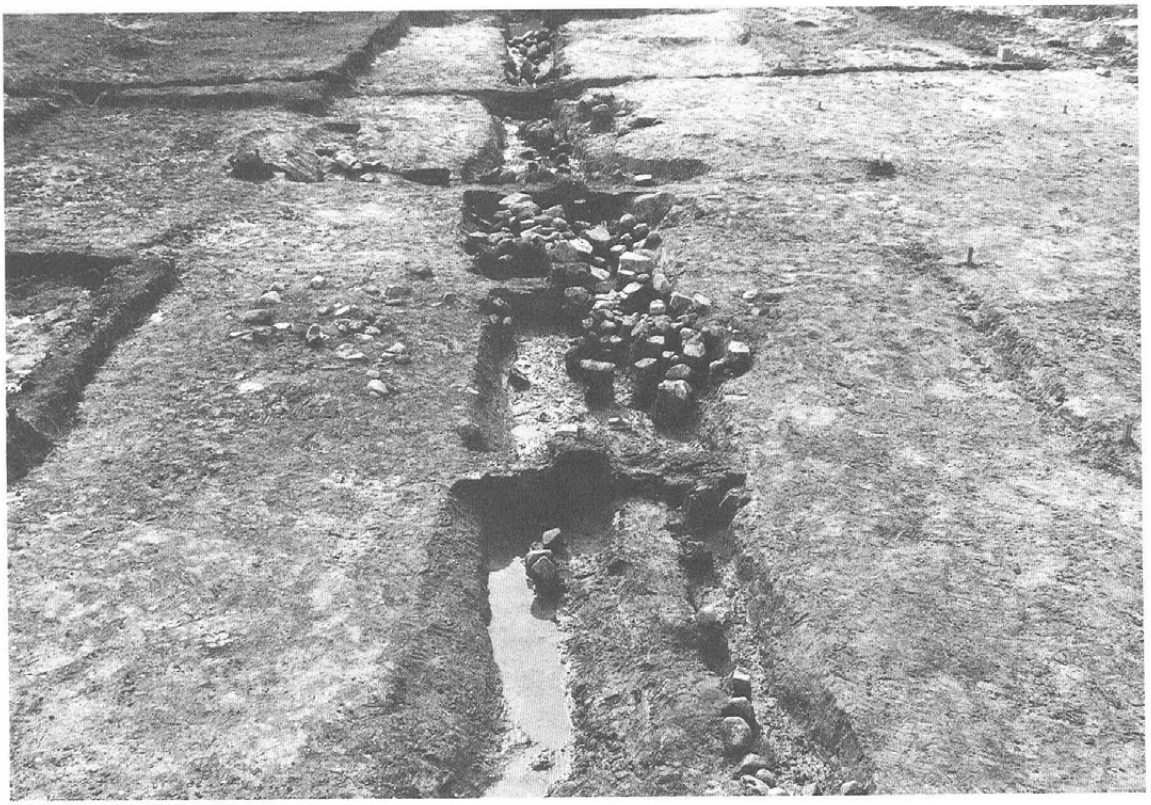
図版　6

1号構及びグリッド出土遺物





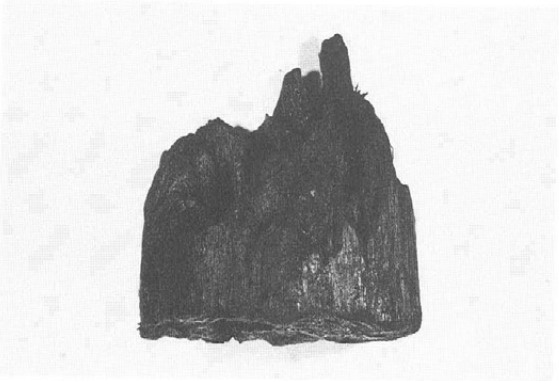
掘立柱建物址群



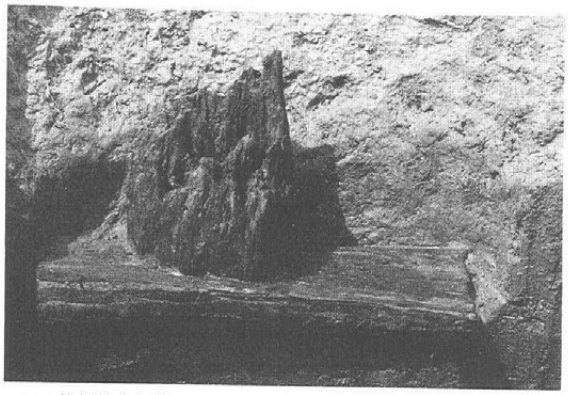
1号溝

1号掘立柱建物址

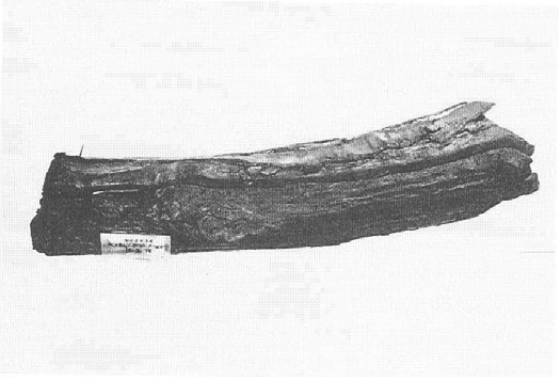
P4 柱根検出状態



P11柱根

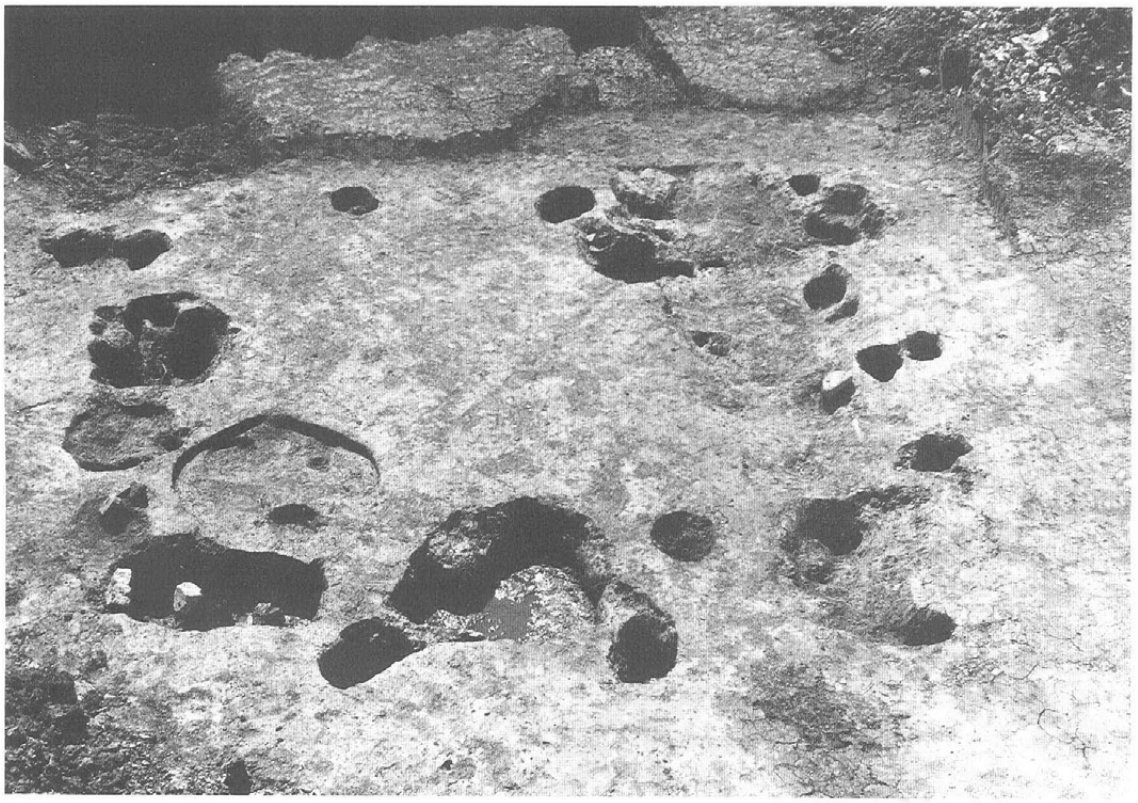


P11柱根検出状態



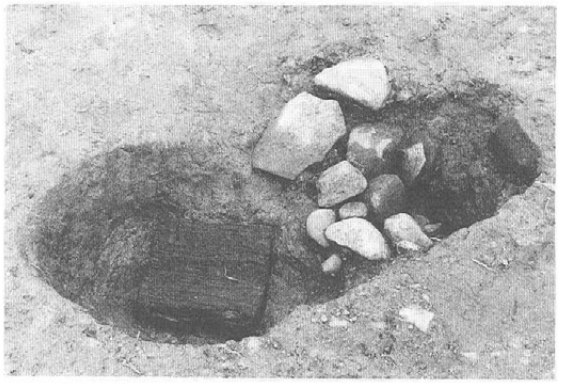
P10・P11礎板(接合)

2号掘立柱建物址

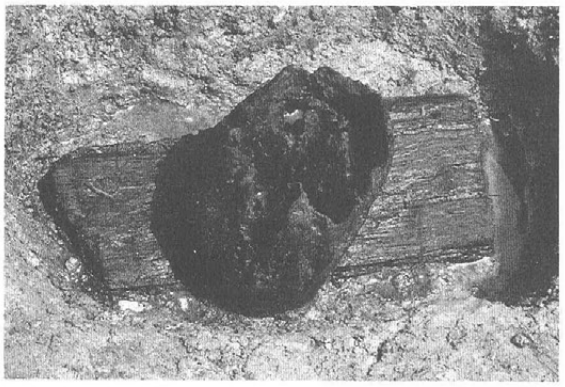


7号掘立柱建物址

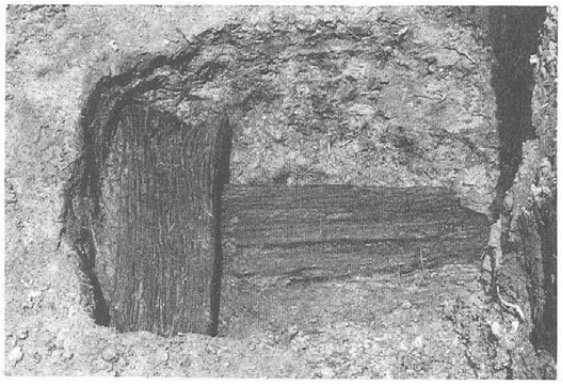
3号・4号掘立柱建物址



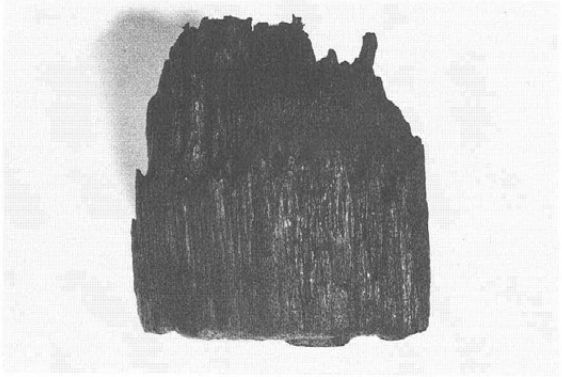
P 41 検出状態



P 31 柱根検出状態

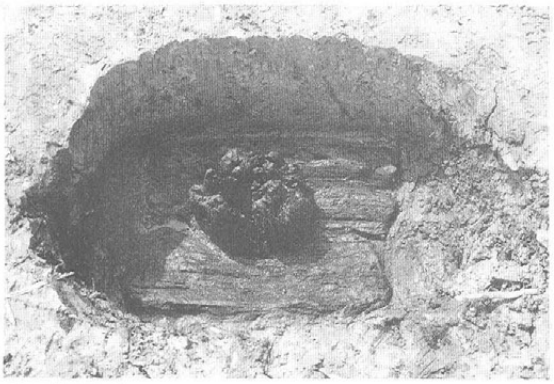


P 45 礎板検出状態

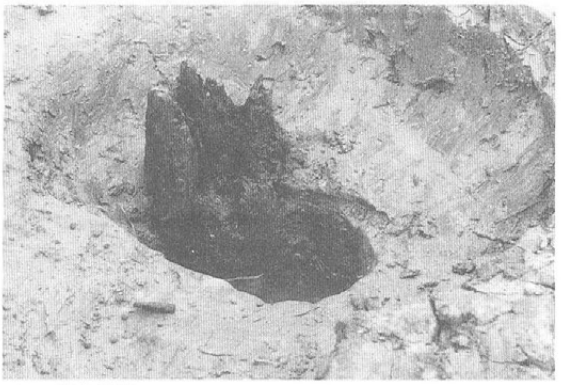


P 32 柱根

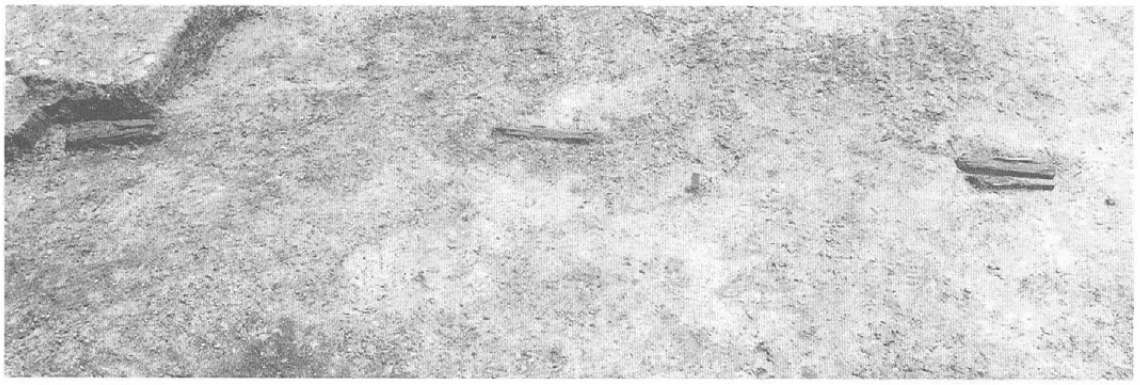
6 号・9 号掘立柱建物址



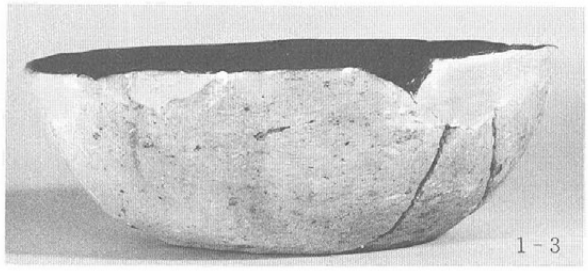
P 30 検出状態

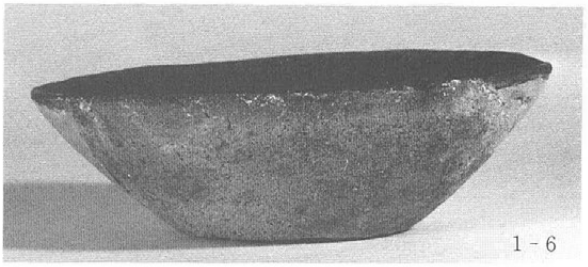


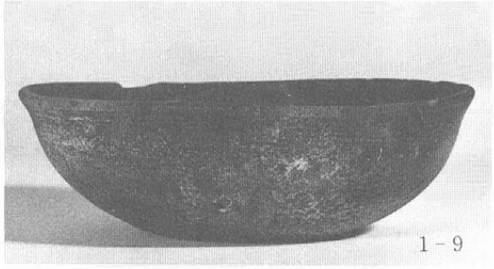
P 88 検出状態

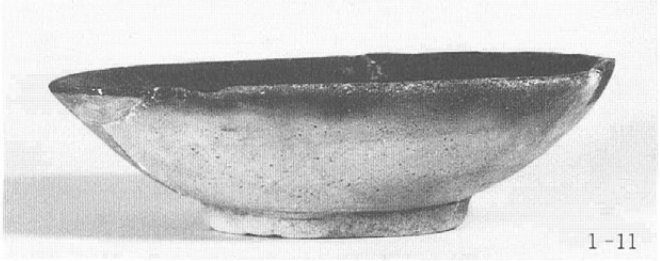


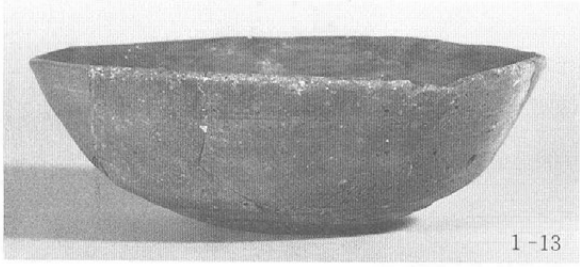
8 号掘立柱建物址

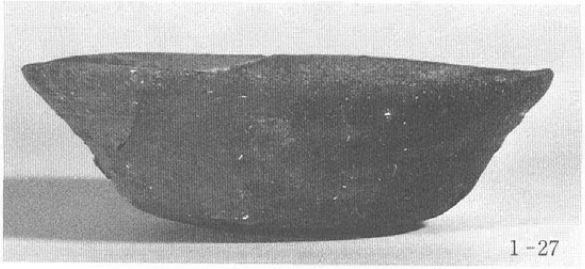

1-3

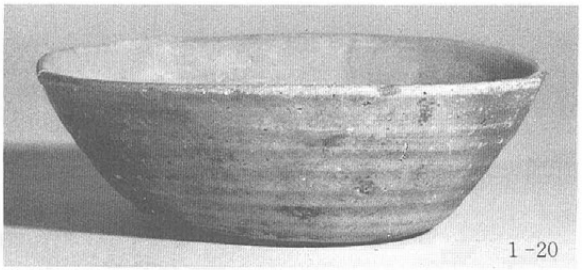

1-6

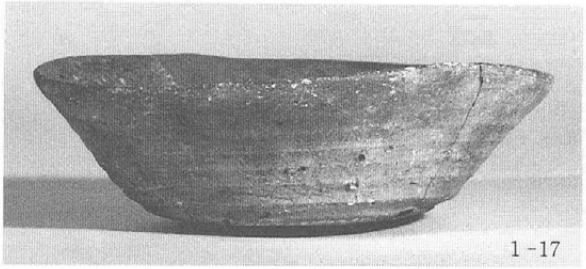

1-9

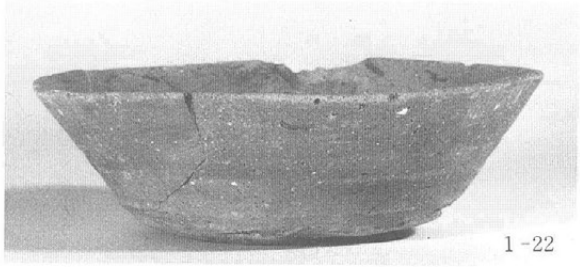

1-11

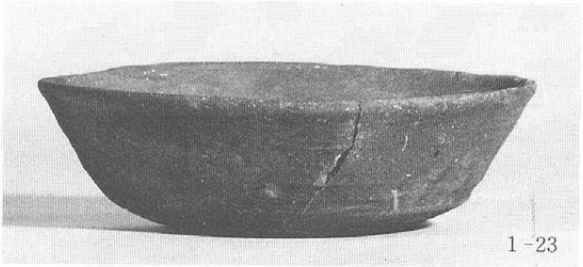

1-13


1-27

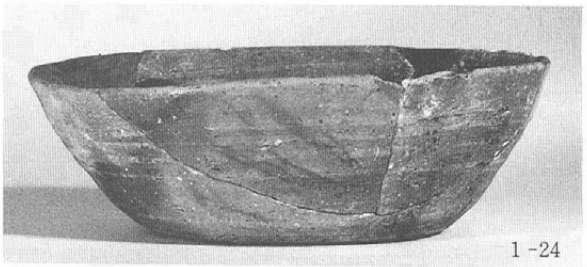

1-20


1-17


1-22

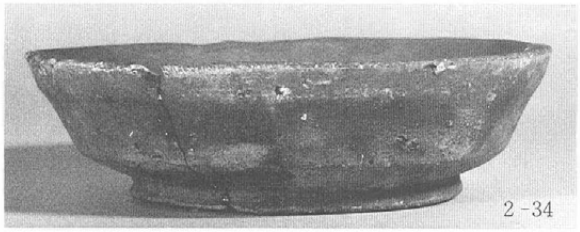

1-23

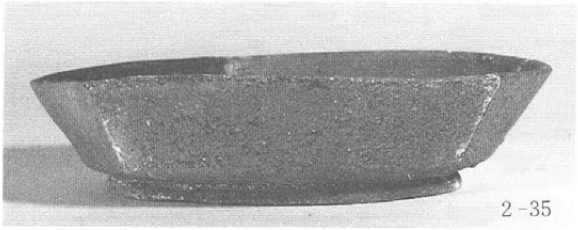
1-16

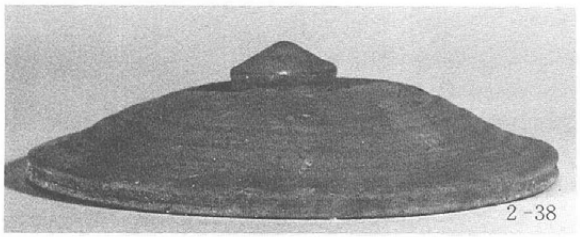

1-24

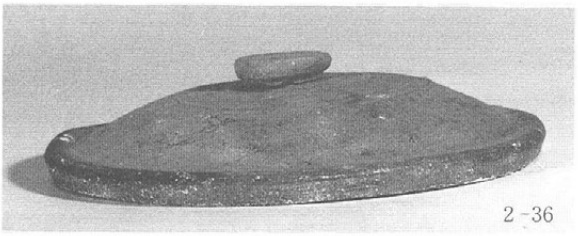
1号溝遺物

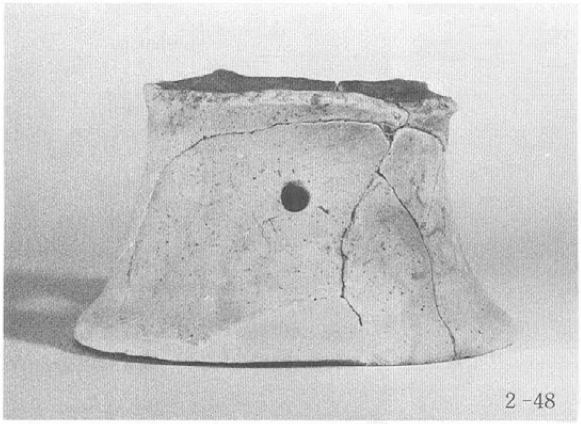
写真中の番号は図版の番号を示す　縮尺½

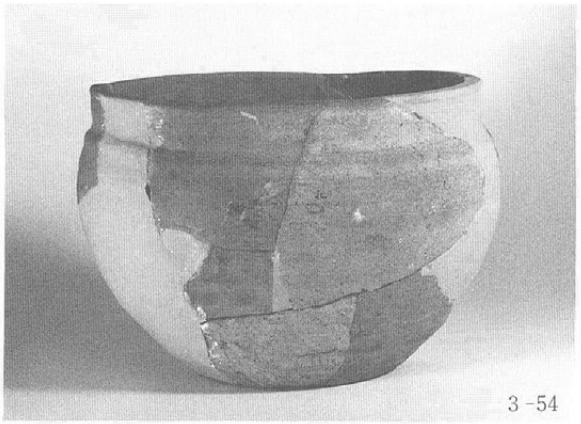

2-34


2-35


2-38


2-36

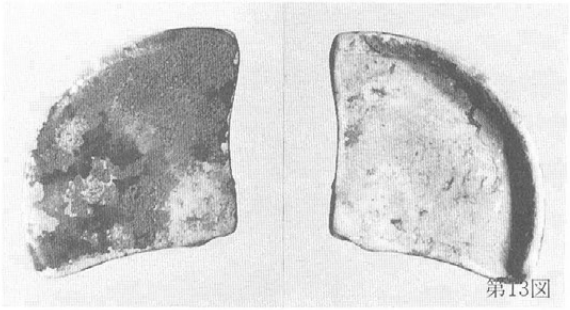

2-48


3-54

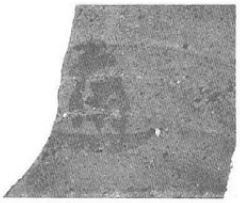
3-59

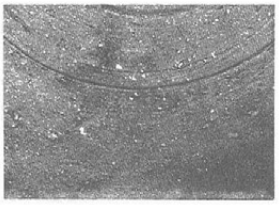
縮尺 3-54・3-59¼、2-48⅓、他½

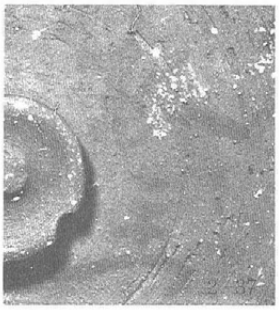
3 -56

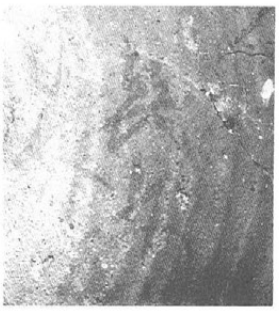


第13図

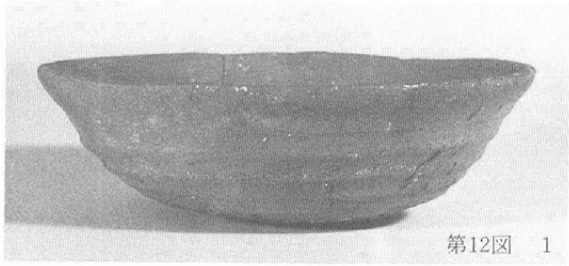




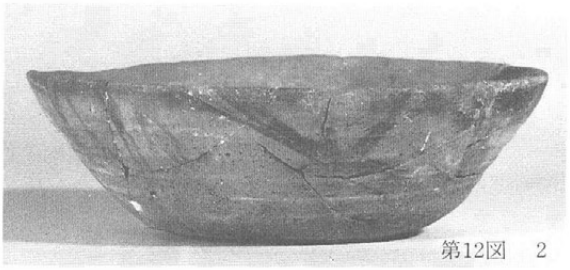




1号溝遺物

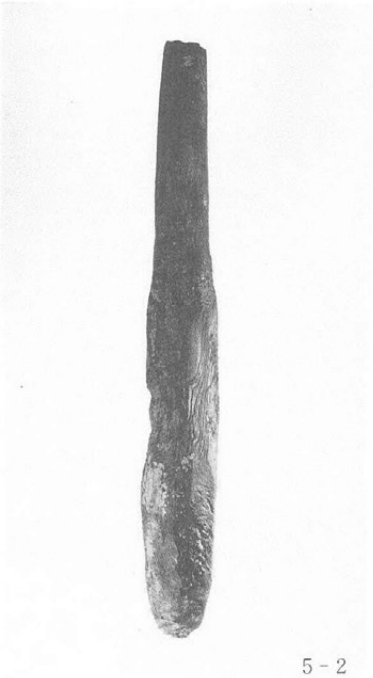


第12図　1

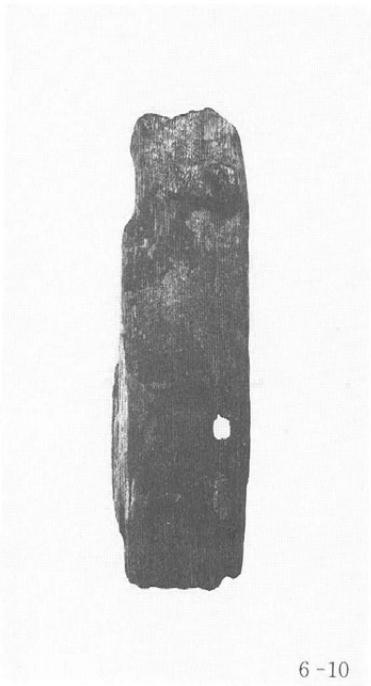


第12図　2

5 - 1



5 - 2



6 -10

出土木製品

第13図　実大、木製品¼、他は½

社宮司遺跡　西部沖県営ほ場整備に伴う発掘調査報告書

発行日　昭和61年３月31日
編　集　更埴市遺跡調査会
発　行　更埴市教育委員会
〒387 長野県更埴市大字杭瀬下762－2番地
ＴＥＬ（0262）　73－2791
印　刷　ほおずき書籍株式会社
〒380 長野市中越293
ＴＥＬ（0262）　44－0277